

群峰

7

追悼 金子幸代先生

二〇二二年四月
富山文学の会

群峰7

富山文学の会

目次

◇追悼 金子幸代先生

巢組 惠理

富山大学で過ごされた日の思い出

―二〇〇二年～二〇〇八年

6

◇研究論文

黒崎 真美

富本一枝「貧しき隣人」を読む

37

錦織 なな子

金子先生に宛てて

13

金山 克哉

『久遠の自像』についての調査報告

―詩人・高島高の多面性

49

長江 弘一

金子幸代氏に学んで

15

水野 真理子

木崎さと子の文学

―富山・宗教・生命の探求

65

今村 郁夫

私にとって一番の恩師

19

久保 陽子

山内マリコ『あのこは貴族』における
女同士のつながり

◇2021年度 活動報告

100

85

追悼
金子幸代先生

二〇二一（令和三）年五月十三日、富山文学の会の創設者で初代代表を務めた金子幸代先生（富山大学名誉教授）がお亡くなりになりました。先生は二〇〇二（平成一四）年富山大学に赴任され、人文学部教授として、研究・教育に尽力されました。森鷗外研究の第一人者であるとともに、富山の文学、特に大正の三閨秀と呼ばれた小寺菊子研究に力を注がれました。小寺菊子に関する論文を多数執筆されたほか、『小寺（尾島）菊子選集（全六巻）』や『小寺菊子作品集（全三巻）』（桂書房、二〇一四年）の編集、金沢市の徳田秋聲記念館の企画展「反骨の作家・小寺菊子の文学」（二〇〇九年）の監修など、果たされた功績には大変大きいものがあります。

今号では、先生を偲び当会の会員や教えを受けた方たちからご寄稿をいただきました。ご寄稿いただいた方々に、この場を借りて感謝申し上げますとともに、当会一同、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

富山大学で過ごされた日の思い出

—二〇〇二年～二〇〇八年

単組 惠理

初めに、富山の地で多大なる功績を残された金子幸代先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

金子先生と私との出会いは今から二十年ほど前になります。二〇〇一年、私は富山大学人文学部に入学し、翌年学部二年時に比較文学コースを専攻し、金子先生の教えを受けました。学部卒業後は、大学院に進学し三年後に修士課程を修了。その後一年間、金子先生のご厚意により私設の助手として、計七年間、先生のお傍で学ばせていただきました。

私はその七年間で、その後の人生の基盤となる経験、思想など、今になってその貴重さがわかるのですが、得難いとしか言いようのないものをたくさんいただきました。特に院生になってからの四年間は私にとって貴重な

ものとなっています。私が大学院へ進学することが決まっただけで、先生は「後輩を指導することが、自身を成長させるのですよ」と、大学のティーチングアシスタントとして採用してくださいました。先生はその他にも、多種多様な機会をたくさん与えてくださいました。大学内では、先生の研究発表の準備、論文の校正などの貴重な研究のお手伝いをさせていただきました。大学外では、日本近代文学会の北陸支部での発表、日本科学者会議の若手研究者を育成するセミナーなど、挙げればきりがないうほど、県内外でたくさん経験を積ませていただきました。そして大学院修了後は、助手として私を個人的に雇って下さったことは、本当に、感謝してもしきれません。お礼も言葉で言い尽くすことはできません。

金子先生が、私をはじめ学生のために下さったことは、本当に数限りないのですが、その中でも印象に残っていることをここでご紹介できればと思います。

金子先生との出会い

金子先生が、富山大学に赴任されたのは、二〇〇二年

のことになります。私が比較文学コースを選択し学部二年に進学して間もない時でした。その初めの講義で、金子先生が、自己紹介としてご自分と森鷗外との出会いについてお話されました。当時先生がおっしゃった言葉とは、全く同じという訳にはいかないのですが、以下のようなお話をおっしゃいました。

私が初めに森鷗外に出会ったのは『舞姫』でした。

みなさんもよく知っていますよね。高校の教科書に載っていますし、『舞姫』で初めて森鷗外を知る人が多いのではないかと思います。私も『舞姫』を高校生の頃に読みましたが、その時、森鷗外って嫌いだなって思ったんです。エリスに対して豊太郎がひどいことするじゃないですか。でも、その当時の国語の先生から、三つ以上作品を読んでからでないとその作家を嫌いとは言えないですよ、と言われて何作か読みました。すると他の作品では女性も魅力的に描かれていることを知って、その後研究したいと思うようになりました。

私は、それまで金子先生を「森鷗外の研究者」という立派で近寄り難い肩書を通して見ていましたが、その時、森鷗外をバツサリ「嫌いだった」という先生を、友達のように身近に感じてしまいました。そして、先生が高校生だった頃の感想を今も大切にされていて、それが今の研究につながっていること。それを率直な言葉で学生に話してくれる事にとっても好感を持ちましたし、自分の憧れになりました。

今思えば、その先生の『舞姫』のエリスに対する思いは、そのままフェミニズム研究につながり、森鷗外研究の中で先生は異彩を放ち、他に類を見ない研究者であることに繋がっているのだと思います。

先生は、私たち学生に、自分が対象作品のどこにどのような感情や感想をもっているのか、それが研究の出発点になるということを教えてくださいました。

これも今思えば、という事になります。先生は、大学の講義の「比較文学概論」（まだ専攻を決めていない一年生が主な対象者で、比較文学を専攻したい一年生の他、専攻がまだ決まらない一年生が参考のために履修したり、比較文学専攻以外の二年生以上が単位取得のため履修し

たりする授業。履修者は約一〇〇名）であつても「比較文学講読」（比較文学専攻の二年生以上が対象の二十名ほどの授業）であつても、全ての学生に、おすすめの本を紹介するという発表を課していらっしゃいました。それは、全ての学生に、自分の感想や思想を大事にして自分の独自の研究の視点を持つことの大切さを教えたい、という先生の思いの表れなのだ、と思います。

比較文学コース生（二年生以上）のための講義には、「比較文学演習」と「比較文学講読」がありました。そのどちらも必ず履修者は全員が発表するものでした。発表しない回の授業でも、受講生は必ず感想シートの提出を求められました。毎回の授業で全員から収集するとなると、やはり準備からその後チェックをする先生も相当手間が掛かったのではないかと思います。その労力を惜しまずに、先生は常に学生自身で考えることの大切さを教え続けて下さいました。

比較文学コースでのご指導

先述しましたが、比較文学コース生（二年生以上）を

対象とした講義には、「比較文学講読」、「比較文学演習」の二つの講義があり、履修者の全員がレジュメを準備し発表するものでした。他コースから先生を慕って受講する学生もいましたが、先生は「甘く無いですけど良いですか？ ご自分の所属するコースでの勉強が疎かにならないければいいのですが」と必ず確認していらっしゃるほど、講読と演習の発表は、片手間には履修できない時間と労力のかかる授業でした。

金子先生の作られたカリキュラムには、二本の柱がありました。一つが文学理論を学ぶ場、もう一つはその理論を用いて実践する場です。先生は、日頃から理論とは、どのように作品に切り込んでいくかの切り口で、それ自身につけておくことは今後全てにおいて役立つとおっしゃっておられました。講義で扱われた理論には、比較文学理論、フェミニズム理論を中心にしていましたが、その他に言語学などもあり、年度によっては個人個人が全く別の理論を扱うこともありました。

言うまでもありませんが、先生は鷗外研究者であり、またフェミニズム研究の第一人者でもいらっしゃいます。では、それを学生に強要するのかとというと全くそうでは

ありませんでした。

理論を実践する場の「講読」で、二〇〇五年に鷗外の『舞姫』を扱ったことがありました。その時は、学生全員がそれぞれの「舞姫論」を発表しましたが、精神論的なものから地理学的空間論、古典との比較、フランス文学との比較など、本当に面白いほど様々で個性的な「舞姫論」が集結しました。その時、先生はどう思われていたか、私には分からないのですが、おそらくこの個性あふれる論を一つ一つ楽しんで読んでおられたのではないかと思います。金子先生は、学生一人一人の個性を楽しみながら指導して下さいっていると、私は常々感じていました。

そして、いざ四年に進学し卒業論文に取り組みとなった時、先生は、私たち学生を資料集めの旅に東京へ連れて行って下さいました。日暮里の駅に集合して、谷中銀座でせんべいをほおばり、鷗外荘（水月ホテル）へ向かいました。鷗外荘には、鷗外が『舞姫』を執筆したときされる「舞姫の間」があり、先生が女将さんに頼んで下さり、中を見せてもらうことができました。そこでは、先生と一緒に温泉にも入り、豪勢な懐石料理もいただきま

した。学生の身分では高級なホテルでしたから、先生にカンパしてもらって旅行に参加している同級生もいました。

翌日には、文京区の鷗外記念館へ行きました。迫力のあるデスマスク、鷗外自作のかわいらしい焼き物が印象的でした。そして、資料集めのため、神田の古本街、国立国会図書館へと連れて行って下さいました。神田は古本街というだけあって、街全体に古本屋が並び、店によって扱われている書籍にも種類があり、初めての私には驚くことばかりでした。金子先生は私たちにマップを手渡し、この店とこの店はまず行くべきと、個人の卒論テーマに合わせて道案内して下さいました。そして、学生には高級な本でお小遣いが足りない場合には、代わりに購入して下さいました。他にも、初版本など貴重な資料が見られる店を教えてください、ここにこんな安くて良い本あるけどどうかしら？ と、古本屋の店員さんのように教えて下さいました。その時に先生が本を見つけてるのが早いのを私が指摘すると、先生は「本がこつちよーって呼んでくれるのよ」と笑っておっしゃいました。そして、休憩時に、ここは有名な喫茶店なのよと、先生

が教えて下さった「さぼうる」で飲んだバナナジュースがとても美味しかったのをよく覚えています。卒論・修論旅行と呼ばれるようになり、比較文学コース生なら受講必須の実習となりました。

また、金子先生はご自分と違う専門家の先生を外部から呼んで下さり、夏休みなどの期間に集中講義を開いて下さいました。私は卒論で中原中也の詩を扱ったので、詩の先生を集中講義に呼んで下さった事がありました。学生のためになるだろうと思われることは、全てして下さいました、思っています。

肝心の論文の内容については、先生は、具体的な事はおっしゃることはあまりありませんでした。「研究をするのに必要な事は全て教えましたよね、あとは、あなた次第ですよ」と声に出しておっしゃりませんでした。私にはそう聞こえました。手取り足取り教える、間違っている方針を変えさせる、というのではなく、あくまでも学生主体で研究を進めるべき、という姿勢を貫かれていらっしゃいました。

学生が集まり学ぶ場

比較文学コースでは「比較文学講読」「比較文学演習」の講義を「比較文学演習室」という専攻ごとに設けられている教室で行っていました。部屋の真ん中に長机が四角型に配置され、周りに椅子を置いて、講義中は、学生が机の周りを囲むようにして座っていました。学生全員が顔が誰からでも良くみえる形で、私は良い形だと思っていました。

金子先生は、その演習室に学生の研究のために必要だと思われる文献や資料をお金に糸目をつけず次から次へと購入し、置いて下さいました。百科辞典などの辞典類から明治大正期の雑誌の復刻版まで、様々な文献や資料で埋めつくされ、しまいには溢れかえっていました。今までに無かった文献、貴重で珍しい資料がそろえられていきました。私をはじめ学生は発表前になると、演習室に行き、レジュメ作りに勤しみました。

比較文学コースの演習室は、発表前の学生の駆け込み寺のような存在になっていきました。充実した演習室があるおかげで、学生同士が一緒になって学び、教え合い、

協力するという精神も養われていったと思います。演習室は、学生が講義を受けるだけの場所から、講義時間外に学生同士が集まって研究する場となり、また、心の拠り所にもなる場所になっていきました。

先生が、学生同士が協力し切磋琢磨し成長していくことを望まれていらつしやったな、と私が思うのがグループワークでした。先生のカリキュラムには、一部分にグループワークが含まれていました。グループワークでは一つの作品や作家や理論書など与えられた課題を分担し、個々に進めながらも、最終的に一つのレジュメにまとめて発表しました。どこをどう分類して分担していくか、個々の準備が進んだら結論はどうするのか、全て学生同士で話し合いながら決めていきました。そのペアを誰と誰にするのが一番効果的なのか、先生はよく悩まれていらつしやいました。院生の私には、〇〇さんの指導をお願いね、と依頼がよくありました。学生一人ひとりのことを考えて下さっているからこそと思います。

学生の共同学習の結晶というべきものが、二〇〇五年度に始まった演劇ではないかと思えます。始まった当初は、片手に台本を持ちながらの朗読劇だったものがどん

どん本格化していき、時代考証にはじまり、衣装から小道具、大道具まで学生が全て揃えていく劇団になっていきました。

先生は、学生にたくさん学ぶ場と、その機会を与えてくださいました。学生のためになることだとあれば、必ずそれを実現させて下さっていたと思います。そういう先生のもだからこそ、学生が集まり、院へ進学する学生も絶えなかったと思います。

先生の人生訓とフェミニズムの精神

ある時、先生は「想像力が大事なのですよ」と、私におつしやいました。それは、私が先生に人間関係について相談に乗ってもらっている時だったと記憶しています。先生は、他にも「不幸なことは、相手への想像力が足りないから起こってしまいます」ともおつしやっています。しかし、その後先生は続けて、「相手に足を踏まれたのなら、痛いと声を上げなければいけません」ともおつしやいました。つまり、先生は、相手に想像力のないことが不幸の原因であり、自分が傷を受けたなら相手に訴

えなければならぬと、人生の先輩として私に教えて下さったのです。

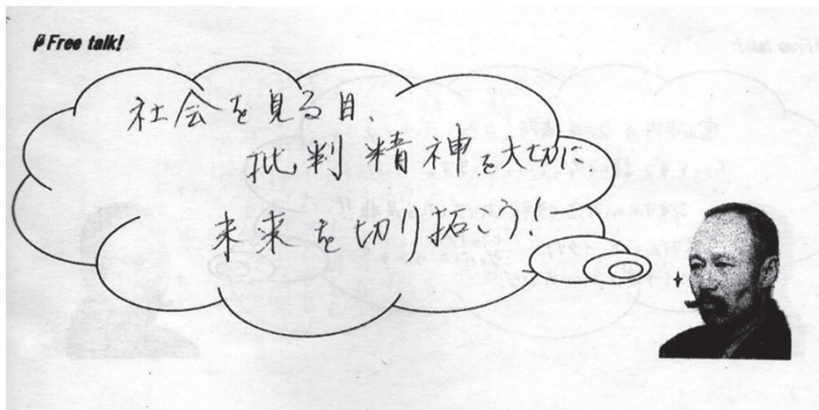
この「痛いと声をあげる」ことは、フェミニズム研究の原点と同じなのだとは私は後々になって思いました。男性が中心の社会で、女性が声をあげていくフェミニズムと同じなのだ。先生が人生訓として私に教えて下さったのは、そのままフェミニズムの精神に通じていました。

先生がおっしゃった「想像力」は、自分と違う他人を思う力と言い換えられるかもしれません。そして、先生はこの「想像力」というのは、「文学」によって磨かれていくものだ、ということもおっしゃっていました。先生は、「文学」には人の「想像力」を育む力があり、また批判精神を養うものだとして教えて下さいました。それは、万人が生きていくうえで必要なものであり、それは後世に大切に受け継がれていくべきものなのです。

文学やフェミニズムには、先生の個人的な思い入れももちろんあることと思います。しかし、私には、学生をはじめ、周りの様々な人達と、それを含めた社会全体を思っている先生のお人柄があつて、文学研究やフェミニズム研究へと繋がっているように思えます。だからこそ、

先生は、常に学生への支援を惜しまず、また富山の地で文学や文化への支援を惜しまず尽力されて来られたのだと思います。

二〇〇七年の比較文学コースの先生のプロフィールには、学生へのメッセージに「社会を見る目、批判精神を大切に、未来を切り拓こう！」(写真)というお言葉を寄



写真：2007年 金子先生のプロフィールより

せて下さっています。現状に妥協することなく、一人ひとり声を上げていこう！ という先生の熱いメッセージが聞こえます。

私は、熱く、そしてあたたかい金子幸代先生のもとで指導を受けられたことを大変誇りに思っています。

(二〇〇八年修了生)

金子先生に宛てて

錦織 なな子

金子先生、体調が芳しくないことは耳にしていました
が、こんなに早く訃報を聞くことになるとは、とても信
じられない思いです。先生のこれまでのご尽力に心から
尊敬と感謝の気持ちを表し、謹んでご冥福をお祈りしま
す。

「比較文学は芋掘りよ！」

比較文学ゼミに入った当時、ただ気ままに気楽に講義
を受けていただけだった私が、なぜゼミ部屋で徹夜して
大量の文献を読み漁る日々を過ごし、院に残り自らも鷗
外研究をすることになったのか。

先生の「比較文学は芋掘りよ！」の声が脳裏に蘇りま
す。

考察を深めるべき作品は、読むだけでは見えてこない
根が土の下に埋まっっていて、縦にも横にも広がっている。

根を辿って掘っていくと、文学を読み解く養分を蓄えた
芋が現れる。こんな比較文学研究の寛容で奥深い芋掘り
的面白さにハマり、二〇代前半の貴重な時間を比較文学
と金子先生に捧げたことに、後悔は決してありません。

金子先生のチャーミングな笑顔ばかりが思い出されま
すが、私が院生となつてからは厳しい面に接する場面も
ありましたね。分厚い『女子文壇』十数冊分の抽出作業
を期限までにせよと指示を受けた時は震えましたが、『女
子文壇』に投稿された明治く大正期の女性文学の若き芽
や、当時唯一の女子向け文学雑誌で交わされる読者間の
交流の様子を知ることができ、『女子文壇』データ化のお
役に立てたことは貴重な経験となりました。

また、実習旅行は先生からお金を借りてでも参加と言
われた時は、貧乏学生にそこまで強いなくてもと思いま
したが、東京で鷗外のお孫さんにお会いできたり、神田
の古書店や国会図書館を巡ったりするうちに、得難い学
びの場を作っていたことが分かりました。生意気
にも拗ねた態度を取ったりしてすみませんでした。先生
のご厚情に深く感謝しています。

がんばったご褒美は回らないお寿司、毎年金子宅で催

されるクリスマス会の楽しみは先生特製のエビとジャガイモの絶品オムレツで、思えばよく餌付けされ先生の意のままに動かされていたようにも思います。院生時代は自由にできるお金も時間もなく、先生の研究のお手伝いをしながら論文を書き上げることに必死の日々でしたが、あんなにも充実した楽しい時間は無かったように思います。金子先生、本当にありがとうございました。

今頃は天国で、ワインを片手に、大きなスクリーンで映画をお好きだけ鑑賞されているかと思うと羨ましいです。いつかそちらに行く時はご一緒させてください。どうか安らかに。

(二〇〇九年修了生)

金子幸代氏に学んで

長江 弘一

金子幸代氏の訃報に触れたのは、令和三年五月のことだった。お身体の具合が思わしくないことは人づてに聞いていたが、まだお若く、まさか、との思いであり、しばらく言葉がでなかった。

追悼を兼ねて、一人金子幸代氏の思い出を書き連ねていたところ、この度の追悼企画を教えてください、ぜひにと寄稿した次第である。冒頭、金子氏のご冥福をお祈りすると共に、氏との思い出を振り返ることで、在りし日の氏を偲びたい。

先生のもとで学びたい

私は富山大学人文学部の学生として文学を志していたが、当初、在籍していたのは氏が比較文学を講じていた国際文化学科とは学科が異なり、学部の講義の一つとして、文学のみならず、映画、アニメなど幅広いテーマに

興味を抱き、軽い気持ちで氏の講義を履修した。それが、金子氏との出会いであり、穏やかな語り口や幅広そうな研究テーマに触れ、この先生のもとで二年生以降学んでみたいと思い、転学科を決意し、比較文学コースの門を叩いたのだった。

ただ、一年生の後半には私は心身上の理由から大学に通うことが難しくなり、休学を余儀なくされた。二年生の四月から比較文学コースの一員として加わることはずいぶん早かった。半年間の休学生活に入り、しばらく大学そのものから遠ざかっていた。

自身の状態が良くなり、いよいよ復学となった。二年生の後期からの復帰ということで、本来一緒にコースに入るはずだった同級生（といっても、まだ面識もなかったのだが）は、すでにコースに溶け込んでいる時期である。もともと人見知りのきらいがあり、新しい環境に対して不安の強い私は、復学に際しても、うまくやっていけるかどうか大きな不安を抱えていた。

そして、ついに迎えた復学当日。金子氏の研究室の前に立ち、緊張感でいっぱいになりながらドアをノックし、氏と対面した。何を話したかは忘れたが、一緒に演習室

(人文学部には、コースごとにこういう名称の部屋があった)へ歩いていったときに、「大丈夫、みんないい人達だよ」と、氏が言われたことだけは鮮明に覚えている。この一言で、私はどれだけ救われたことか。かくして、一緒に演習室の扉を開け、所属する二年生から四年生までの歓迎を受けたのだった。その雰囲気、金子氏の言われた「大丈夫」ということは、どうやら間違っていないようだと感じた。

自主性を重んじる

金子氏の教育方針は、学生の自主性を重んじるということが特徴の一つだったと思う。文学解釈の発表ひとつとっても、自由にやらせ、あれこれと細かく指示されることはなかった。そして、学生がその人なりに調べ、出した結論については、良いところを褒めるというのを大切にされていた。これが、コースの、良い意味でのびのびとした雰囲気につながっていたと思う。私自身、復学してはじめて取り組んだ比較文学講読では、森鷗外の短編を一つ取り上げ、先行研究を必死に集め、読み、自分

なりの解釈を試みたが、発表が終わると、まずは良かった点をいくつも挙げていただき、大きな達成感を味わったことを覚えている。

学外研修としての東京旅行も思い出深い。卒論を控える学生に対し、資料探しとしての神保町古書店巡りや、森鷗外、夏目漱石といった文豪たちの作品の舞台となった谷根千界隈の文学散歩、上野の鷗外ゆかりの宿での宿泊などが企画された。私も、四年生になる直前の春休みを最初に、その後何度か(休学していたため卒業には五年かかった)訪れた。

この旅行では、神保町の、見渡す限り古本屋ばかりの風景や、谷根千の下町情緒溢れ、かつ文学にゆかりのある場所に触れるという、それまでしたことなかった経験をした。知的好奇心を刺激される、とはこういうことかと思うくらいであった。文学は本の中、文字で味わうもの、という考えだった私にとっては、作品の舞台を歩くというのは、文学と現実世界とをつなぐ経験だった。今でこそ、アニメや小説、ドラマの舞台を訪れるいわゆる「聖地巡礼」が広く行われているが、当時はまったくの新しい世界を見つけたような心持ちになった。この体

験が忘れられず、その後何度も個人で東京を訪れては、同じような行程を組んで楽しんだものだ。

学生思いの人柄

金子氏のお人柄としては、学生思いであり、また交流がお好きであったことは忘れてはならない。節目ごとのコンパはもちろん、学生を自宅に招いてのクリスマスパーティー、富山県内各所への観光などが思い出される。この原稿を書くにあたり、大学時代のメールを見返したが、称名滝、ボウリング大会、イタリアンでのランチ会など、懐かしいやりとりが沢山残っていた。

自宅で毎年開催されていたクリスマスパーティーでは、大勢の学生のために早くから得意料理の数々（カレーやオムレツなど、どれも絶品であった）を用意され、玄関のクリスマスリースをはじめ賑やかに飾り付けをされていた。招かれた学生も、楽器の演奏をしたり、得意の歌（流行歌から洋楽、演歌まで）を披露したりと、和気藹々としていた。私自身も、習って間もないキーボードを持ち、先輩のギターや歌と一緒に数曲披露したものであ

る。ジョン・レノンの『Happy Xmas』など、あの時演奏した曲は今聴いても当時の光景が思い浮かぶし、こうして書いていると金子氏の笑顔がありありと思い出される。

学生思いという点は、研究室を尋ねれば、いつでも嫌な顔一つされず、温かく迎え、とっておきのコーヒーを振る舞いながら、雑談にも、悩み事相談にも付き合ってくださったものである。私自身、復学当初から気にかけてくださっていたことが身にしみだし、人間関係の悩みを打ち明けた時には真剣に聴いてくださったことをよく覚えている。いろいろあって、卒業後すぐに就職できず、自分の将来が定まっていなかったときも、学生時代と変わらず研究室に迎えてくださった。恒例行事となっていた学生による演劇発表会にも、観客として招いてくださった。

山登りがお好きでもあり、レベルの高いレポートを課した際には、べ切が近づくと、もうすぐ登り切ります、と激励のメールを学生に送られたことも懐かしい。

本物に触れる大切さ

「本物に触れる」ことの大切さも、ことあるごとに学生に伝えておられた。東京での文学散歩もそうであろうし、学生にとつてはちよつと値がはると思われるお店での食事会もそうだろう。良いもの、本物に触れ、レベルの高い課題もやり抜き、人間として成長してほしいというのが、金子氏の気持ちだったのだ。

こうして書いていると、金子氏との思い出は尽きないし、どれだけ貴重な学生生活を送ることができたのかを、十数年経って改めて感じさせられる。大学を辞され、富山を去られても、どうされているのか気になっていたり、いつかまたお目にかかれる機会があつてほしいと願っていた。残念ながら叶わなくなつてしまつたが、金子氏との思い出を振り返れば、在りし日のお姿が目の前に浮かんでくるようで、再会を果たしたような気分になれた。

金子幸代氏の元で学べたことは、私にとって本当に大きな財産である。改めて氏に感謝をし、ご冥福をお祈りしたい。そして、今回の追悼企画をいただいた富山文学の会の皆様にも感謝したい。

(二〇〇八年卒業生)

私にとって一番の恩師

今村 郁夫

私は富山大学で金子幸代先生のコースに入り、修士二年生まで五年間お世話になりました。この五年間は濃密で、思い出は数多くあります。先生との出会いから授業や授業外での交流、演劇上演などについてつづりたいと思います。一部記憶違い等あるかもしれませんが、あらかじめご了承ください。

親しみ感じる先生

私が金子先生の授業を初めて受けたのは、学部一年生（二〇〇四年）前期の国際文化入門です。これは富山大学人文学部国際文化学科（当時）所属の先生方が一年生を対象にリレー形式で開講されていたものです。金子先生の回は一回だけで、この時はさまざまな先生や研究があるのだなあとと思うだけでした。

後期に入り、二年生以降のコース選択のため、複数の

コースの概論を受講しました。その中に比較文学概論もありました。比較文学概論では、森鷗外をはじめとした作家を取り上げ、比較研究の仕方や、文学だけでなくジャンルを飛び越え、映画なども研究できることを学びました。コース選択を迷っている中、私にとってこの守備範囲の広さはとても魅力的に感じました。

比較文学概論には、先生から学生への一方通行にならないように受講生がおすすめの本を発表する時間も設けられていました。確か私は恩田陸の『夜のピクニック』を紹介したのですが、発表後、先生から面白そうだから貸して、と言われ、先生にとっても親しみを感じた記憶があります。今振り返ると、比較文学コースを選んだのはこのことが大きかったのかもしれない。

コースに入った二年生からは本格的に先生の授業を受けることになりました。その中にはいわゆるゼミ形式のものもありました。優秀な先輩方がいろいろと教えてくださったので、ゼミ形式にはすぐに慣れましたが、発表者に対して「良かったこと」や「こうしたらもっと良くなる点」などを記す通称コメントシートを書くのには時間がかかりました。結局、その日の授業が全部終わった後、

先生の研究室に持つていくことがたくさんありました。そこでは、先生と院生の方が仕事をしているのですが、いつも笑顔で迎え入れてくれたのがうれしかったです。映画の話とかもしてくださり、つつい長居することもありました。

私が先生に親しみを感じることは、学期末の打ち上げと一緒に楽しんでくれることも忘れられません。先生は手相を見るのが得意だと言って見てくれたことがあります。何を言われたか、しっかりと覚えていますが、ものすごく文系だねという旨のことを言われたように思います。自分で言うのも何ですが、高校時代は数学が得意な方だったので意外に思っていました。けれど、社会人になって文系寄りの仕事をしていることを考えると、案外当たっているなあと感じています。

冬休み前の打ち上げは先生のご自宅にお邪魔してのクリスマス会です。プレゼント交換も楽しかったですが、そこで食べるカレーがおいしくて、おかわりしていたことを覚えています。

学外実習も充実していました。特に卒業論文の資料集めも兼ねた東京方面への実習旅行は一大イベントです。

国立国会図書館や神保町の古本屋街での文献調査は充実していて、個人的に帰りの電車を一本遅らせたこともあったほどです。

明治の脚本を初上演

先生との思い出では、演劇の上演を語らないわけにはいきません。ことの始まりは二〇〇五年後期に明治の総合演劇雑誌『演藝画報』を授業で研究したことです。研究の成果として最後に朗読劇を発表することになりました。それがいつの間にか（経緯はちよっと思いません）衣装や大道具小道具を準備して上演することになりました。経験のある人はわずかで、ほとんどは未経験です。授業時間以外も集まって練習や準備をし、夜遅くなつた際は、みんなでご飯を食べたりして楽しく頑張っていました。夜遅くと言えば、演習室（各コースに割り当てられた部屋）で授業の発表準備等を遅くまでしている、先生が帰りしなに、みんなでご飯食べに行こうかと誘ってくださることもありました。

話がそれましたが、この時上演したのは福田琴月脚本

の『虚栄心』で、過去に上演された記録がないことから初上演であるとされました。先生は衣装を準備してくださったほか、広報に力を入れてくださり、新聞にも掲載されて話題になりました。その後も鷗外の戯曲や翻訳作品を中心に演劇上演は毎年続き、コースの特色の一つとなりました。

実際に上演するためには、登場人物の心情を考えたり、当時の服装を研究したりと、作品をより深く読み込むことにつながります。初めこそ上演に気が進みませんでしたが、このような良さが分かって、文学研究がより面白く感じました。このような機会を与えてくださった先生には感謝しかありません。

先生の授業では『椋鳥通信』研究も印象深いです。『椋鳥通信』は森鷗外がヨーロッパの出来事を現地から記事形式で寄せたもので、雑誌「スバル」に複数年にわたって連載されました。岩波書店版の全集で、まるまる一冊が『椋鳥通信』にあてられており、一〇〇〇ページ近くの作品です。講読の授業でグループに分かれ、記事の分類や人名索引作りをはじめ、時代背景等と絡めながら記事の考察を行いました。先行研究が少ないため、研究の

仕方に迷い困っていた私たちに、先生は「みんなの研究が先行研究になる」という趣旨のことをおっしゃってくれたように記憶しています。苦勞の連続ではありませんが、最先端の研究をするというのは、私にとって刺激的で得難い体験になりました。

今につながる貴重な経験

私は学部を卒業し、先生のもとで研究するため修士課程に進みました。その二年間で学会発表を含め自分の研究を深められたほか、ティーチングアシスタント(TA)としての仕事も良い経験になったと思います。授業の準備や補助だけでなく、先生の研究に触れたことは貴重な経験でした。直接今の仕事に役立っているわけではないかもしれませんが、TAで培った考え方は今につながっていると感じています。

金子先生は私にとって、一番の恩師です。本当にありがとうございました。

(二〇一〇年修了生、富山文学の会会員)

書評 金子幸代著 『森鷗外の西洋百科事典
『椋鳥通信』研究』

近藤 周吾

二〇一九年五月、『森鷗外の西洋百科事典 『椋鳥通信』研究』（鷗出版）が刊行された。昨年二〇二一年五月に亡くなった著者の「遺著」である。

ただし、ドイツにおける鷗外の観劇体験の重要性を説き、やまなし文学賞を受賞した前著『鷗外と近代劇』に多くの書評が寄せられたのに比べ、本書はあまり知られていないという憾みが残る。

そこで以下、そのあらましを紹介しつつ、研究上の意義を探ってみることにしよう。もとより評者は鷗外の専門家ではないから、細々としたところは精確でなからうし、門外漢なので的外れなところも多々あるには相違ないが、諸賢が本書を手にとるきっかけとなればと考え、あえてペンを執ることにした。

あらかじめ断っておくと、この著者には二冊の遺著が存在する。厳密には、刊行年から『鷗外 わが青春のド

イツ』（鷗出版、二〇二〇年一月）が最後の単著と目されよう。ただ初出を見ると、雑誌『新薬と治療』（山之内製薬、一九九六年二月〜一九九九年二月）とあり、前世紀の仕事である。また、内容も『舞姫』／『文づかひ』／『うたかたの記』の舞台であるベルリン／ライプツィヒ・ドレスデン／ミュンヘンをめぐるコラム集で、確かな研究の裏づけはあるものの、一般の読者向けの読み物の域は出ない。もちろんそれはそれで、啓蒙・アウトリーチ活動にも積極的であった彼女らしい仕事と言える。

それぞれの都市の鷗外ゆかりの名所ごとに、引用あり、写真あり、三〜四段落の短いコラムありと、珠玉の旅行記に仕上がっている。そもそも旅行記が持っているはずのハイブリッド性と、この著者特有のそれとが相まって、独自の魅力を発しているのだ。だから、読者にこれを推薦するにやぶさかでない。けれども、そうはいつでもやはり、彼女が一流の研究者であった証、ということになれば、これを唯一の遺著とするのに、ためらいもある。というわけで、二著をもって遺著となす。これが評者の結論である。

事実、闘病生活に入る前の二〇一一年から二〇一四年

の間に発表された『椋鳥通信』研究を、病床において編み上げた本書こそが、以下に述べるがごとく、著者の鷗外研究の集大成と呼ぶに相応しい一冊なのである。

一

『スバル』一〇号に掲載された無名氏「むく鳥通信」(一九〇九年八月一三日発)全文の影印があしらわれた「表紙」(カバー装)からして、すでに並々ならぬこだわりが感じられるだろう。

内容は、全五章。既発表の論考五篇に、「はじめに」・「あとがき」・「資料」を加え、A5判、全二四四頁にまとめられた著作である。本体定価、四、五〇〇円。ISBN、九七八―四―九〇三二五―一―一五―八。目次は、左記の通り。(ただし、ローマ数字の付与は、評者による。)

はじめに

I 『椋鳥通信』における鷗外の引用戦略——「市民的公共圏」を求めて

II 森鷗外の『椋鳥通信』——『さへづり』・『沈黙の

塔』へ

III 二十年後の海外通信員——『舞姫』と『椋鳥通信』
IV 森鷗外とミュンヘン画壇——『独逸日記』から『椋鳥通信』まで

V 森鷗外のドイツ観劇体験——日本近代劇の紀元
あとがき

初出一覧

資料『椋鳥通信』の原典「ベルリナー・ターゲブラット」(一九一二年一〇月〜一九二二年一二月)

本書が、研究の俎上に載せるのは、鷗外研究の最後の砦、『椋鳥通信』である。

『椋鳥通信』は、一九〇九年(明治四二年)三月から一九一三年(大正二年)一二月の終刊までの約五年間、途中三回の休載はあったものの、雑誌『スバル』に全五回、連載された海外消息記事である。署名は「無名氏」(第六回は「無名氏」、第二八回は署名なし)。ドイツ在住という設定だ。生前の単行本には収められなかった。

取り上げられる人名の総数は、約七、二〇〇名。拾遺も含め『鷗外全集』二七卷(一九七四年一月、岩波書店)

に収録された総頁数は、八五一頁の大部に及ぶ。日露戦後、第一次世界大戦前のさまざまな情報を、つまり狭義の文芸にとどまらず、政治経済も含む欧米各地の幅広い情報の数々を、全線開通したシベリア鉄道の力もあずかって当時としてはリアルタイムと言っても差し支えないスピードで、コンパクトに翻訳・紹介した著述であった。実際、マリネツェイの未来派宣言やトルストイの遺書も、『椋鳥通信』によっていち早く和訳されたのである。ところが、このような質量にもかかわらず、これまでの鷗外研究においては、全くといってよいほど評価されてこなかった。

《 鷗外の西洋文化紹介と呼べる『椋鳥通信』について、なぜこれまで真正面からの研究がなされてこなかったのか、という理由は三つあると思う。第一の理由は分量の問題である。(……)ひと通り読み通すだけでも大変な時間と労力が必要である。第二の理由はその内容である。演劇、小説、美術など芸術関係の他、政治、事件、犯罪、科学など雑多な内容が無秩序に紹介されていて、とりとめのない印象がある。さらに、人名や作品名などが原語

で書かれているので、はなはだ読みにくい。取り上げられている作家も、トルストイやストリンドベリなど大物もいるものの、今日では忘れられた作家や芸術家も多く、興味を引かない。第三の理由は、これが研究の対象と認められない最大の理由であろうが、『椋鳥通信』には種本ならぬ、種新聞があることである。(……) 鷗外の創作ではなく、当時のドイツの新聞の文化欄から興味を覚えた記事を抜粋しただけであり、オリジナリテイがない》

研究の困難が、この「はじめに」からも明確に伝わってくる。この研究は、科学研究費基盤研究(B)および(C)を受けていたが(「森鷗外『椋鳥通信』における西洋文化の受容と伝播の総合的研究」および「森鷗外『椋鳥通信』に見る『スバル』『三田文学』の雑誌間交流に関する研究」)、その大胆な性質からすれば、この研究は挑戦的研究にカテゴリー化されていても驚きはしない。これまでの研究の保守性への挑戦が内包されているからだ。

ここで評者が口を挟んでおくと、『椋鳥通信』の悲劇は、最初とその次の鷗外全集刊行会版『鷗外全集』に収められなかったという歴史的事実が関係している。『椋鳥通信』

が最初に収められたのは三番目の全集、すなわち岩波書店版の『鷗外全集著作篇』第十七卷（一九三六年十一月）であった。斎藤茂吉も、永井荷風も、これを枕元に置いて読んだのである。つまり、文学者は適応したのだが、研究者は『鷗外全集』第二十七卷（前出）に索引が収められた後でも相変わらず、研究のパラダイムを更新することはなかった。ここに研究史上の間違いがあったと見てよい。既成の研究のなぞり書き、焼き直し、再生産が主流の保守的な本邦学界では、あえて火中の栗を拾おうとする気概が起こらない。鷗外研究でいえば、越智治雄「鷗外と近代劇」『明治大正の劇文学』一九七一年、塙書房）による低評価という呪縛により、著者の『鷗外と近代劇』——富山文学の会での討論の席で、書名に疑義があったと記憶するが、この題は先行研究である越智の反措定を企図したものだ——が誕生するまでにひどく時間がかかったのと相似する構造が、ここにも透けて見える。夙に石川淳が『森鷗外』（三笠書房、一九四一年一二月）において、鷗外の史伝を高く評価してみせたように（ちなみに彼は鷗外の実弟・三木竹二の業績へもいちやく目配りを利かせ、演劇ジャンルをも視野

に収めていた）、旧態に挑戦する姿勢が著者の『椋鳥通信』研究の底流にも流れている。そう評したとしても、あながち的外してはいないつもりだが、どうだろう。ともあれ、小堀桂一郎『森鷗外——文業解題（創作篇）』（岩波書店、一九八二年一月）以降、停滞ぎみであった『椋鳥通信』の研究を、ドイツの新聞『ベルリナー・ターゲブラット』に的を絞ることで、長い時間をかけて粘り強く動かしにかかった意気を私たちは高く買わねばなるまい。

さて、以下、I～Vの順に、各章の内容を追尋していこう。

Iでは、鷗外の執筆意図を具体的に検討している。まず、一九〇九年一月一六日発となっている第一回目の通信に取り上げられた雑多な一五の記事が、一年後の一九一〇年一月六日発の記事では二〇三項目に激増した事実を指摘し、そうした紹介欲がどこからきたのかと問う。そして、単なる海外事情の紹介から、『椋鳥通信』を鷗外自身が利用しようとした、引用戦略があったと看破する。具体的には、出版禁止や上演禁止といった検閲に関わる海外事情が繰り返し紹介されていることから、連載当時

の日本の言論統制を批判する意図があつたとする。さらに、革命へ向かいつつある政治動向を小手先の対応では押しとどめられないという鷗外の現状認識を見出す。そう理解すれば、あえてドイツ語やフランス語のまま原文を和訳せずに引用した部分についても説明できる。堺利彦「へちまの花」と対比しながら、「両者は諧謔的な題名のもと文芸の紹介や発表を趣旨としながらも、冬の時代にある日本の思想・政治状況への視線を失わなかった」、「明治政府の圧制のなかで「市民的公共圏」を創り出そうとする試みであつた」とする結論には、説得力がある。

Ⅱは、一九〇九年三月から一九一〇年二月までの『椋鳥通信』の記事を分析し、演劇・文学・美術が高い割合を占め、女性に関する記事が多く取り上げられていることを実証する。その上で、日露戦後の日本文学の変化について、ドイツをはじめとする文学の翻訳や演劇・美術との総合的な視点から究明する研究に『椋鳥通信』が寄与し、日欧文化交流史の実態を掘り起こすものとなる可能性を示唆する。また、無名氏とするものの、連載当時から鷗外が執筆していたことが知られていた事実を『読売新聞』の記事から明らかにし、従来の説を訂正する。

さらに、『椋鳥通信』の女性に関する記事の一部が『女子文壇』へ転載されていることを指摘する。そして、女性参政権やポルトガル革命の問題と絡めて『さへずり』と『椋鳥通信』を検証するとともに、『沈黙の塔』に見える文芸の取り締まり強化と正宗白鳥『危険人物』が野口米次郎によって海外に紹介されたことを紹介する『椋鳥通信』と紐づけする手際は鮮やかと評せよう。

Ⅲでは、『舞姫』の太田豊太郎が「政治学芸の事など」を伝えるベルリン通信員になり、各種の新聞を手当たり次第に読み、記事の材源を探すところに着目する。とりわけ「民間学」という語に注目し、豊太郎が「官学」で得ることのできない「見識」を獲得したことに注意を喚起する。その上で、『舞姫』の主人公と二〇年後に『椋鳥通信』を執筆する鷗外の姿を重ねていく。「鷗外は、欧米文化を理解するためには、豊太郎の獲得したような「総合的」な見識が必要だと考えていた。」なお、もう一つ興味深いのは、エリスと豊太郎の間に「異文化接触の軋轢が描かれていない」との指摘であろう。「むしろ豊太郎の場合、困難は母国や同国人との関係のなかにあつた。」

Ⅳは、森鷗外と西洋美術との出会いについて述べる。

それは『独逸日記』一八八五年五月一三日に「就中ラフアエルロ Raffaello の童貞女は世の久く夢寐する所なりしが、今に到りて素望を遂ぐることを得たり。」と記して以来、すなわちドレスデンの美術館でラファエロの聖母像を見て感激して以来のことであるが、鷗外の美術に対する関心を決定的、根本的に高めたのは「うたかたの記」の巨勢のモデルとなった洋画家の原田直次郎とミュンヘンで出会ったことにある。著者の筆は、しばし鷗外から離れ、美術都市ミュンヘンで学んだ原田の画業を追う。フランス・レーンバッツハや原田の師であるガブリエル・フォン・マックスなどミュンヘン画壇を眺めた後、第三回内国勸業博覧会に出品された原田の「騎龍観音」と「毛利敬親公の肖像」を分析していく。美術史家の土方定一によれば、鷗外が黒田清輝らの新派と距離を取ったのは原田を擁護するためと見たが、著者は鷗外の絵画に対する見方はミュンヘン画壇および「原田の絵画観にあまりにも影響され過ぎていた」と鷗外の限界を誤たずに評している。鷗外がドイツに留学して三〇年近く経ち、アカデミズム旧派が衰退した一九一〇年前後に著された『棕鳥通信』でも、新派以上に旧派の紹介が詳細になされて

いるという。ベルリン分離派の展覧会を異常なまで詳細に紹介しているのも、やはり原田を擁護する従来の文脈と、依拠した新聞に負うというのが著者の見解である。

Vは『鷗外と近代劇』の著者の本領発揮で、ライプツィヒ・ドレスデン・ミュンヘン・ベルリンでの観劇体験をたどった上で、帰国後の演劇への関心を整理する。島田謹二の「ごくのん気なもの」という発言を「むしろ積極的、目的意識的に演劇を吸収していた」と批判し、佐藤春夫の「ドイツに渡った鷗外森林太郎の洋行の事実を近代日本文学の紀元としたい」という評言を踏まえ「まさに鷗外のドイツ留学こそが日本の近代劇の紀元でもあった」と締めくくる。

「あとがき」では、「イギリスの女性参政権運動（サフラジェット）についての記事が多いことに気づいた」ことを明かし、最初の単著『鷗外と〈女性〉』や編著『鷗外女性論集』以来、「ずっと注目してきた」と言う。実際、『棕鳥通信』の女性関連記事の抜粋は後者で読むことができる。さらにそれを推し進めて、「鷗外研究史において、これまで『棕鳥通信』は軽視、あるいは無視されてきた。『棕鳥通信』は鷗外の手すさび、趣味的な西洋文化記事

の翻訳・紹介の集積であると」いう見方は誤りであるとした上で、「むしろ、作家としての鷗外の秘密、また人間鷗外の素顔も見える重要な作品である。」と結論づける。そして、ここから研究者としては異例の告白となるが、著者がドイツに留学していた一九八二年から八四年を回想し、両親や親戚、友人たちに送っていた私家版の「ドイツ便り」に言及し、著者自らも鷗外に倣い、「仮面」を外して、素顔を明らかにし、肉声を響かせるのである。さらには、楽屋裏である富山大学人文学部の比較文化ゼミの様子を回顧しつつ、感謝の言葉が述べられる。著者はこのとき、死を覚悟していたのかもしれない。

二

遺著の紹介という性格上、著者のこれまでの業績についても簡単に振り返っておきたい。著者の業績はきわめて多岐にわたるが、単著ということではほぼ全部で五冊ある。

①『鷗外と〈女性〉——森鷗外論究』（一九九二年、大東出版社）

②『鷗外と神奈川』（二〇〇四年、神奈川新聞社）

③『鷗外と近代劇』（二〇一一年、大東出版社）

④『森鷗外の西洋百科事典 『椋鳥通信』研究』（鷗出版、二〇一九年五月）

⑤『鷗外 わが青春のドイツ』（鷗出版、二〇二〇年一月）

およそ一〇年おきの周期で刊行されてきたこれまでの単著は、一瞥してすぐに気がつくように、頑固一徹、いずれも鷗外研究である。ただし、最初の三冊がすべて『鷗外とく』という書名であることからわかるように、「鷗外オンリー」ではなく、「鷗外プラス」を企図していたことも明白である。

学術書として、このような標題の命名の仕方に対しては依然、眉をひそめる向きもあるかもしれない。重心がどっちつかずに陥り、論理が拡散しやすい、と。だが、改めて俯瞰してみると気づくことができようが、旧来の作家論を墨守すると同時に、相対化しようとするという、もう一つのベクトルも鮮やかに浮かび上がってくることは見逃せない。この著者の場合にかぎっては、頑迷である一方で、柔らかさをも併せ持った戦略的Ⅱ確信犯的命

名法と評せよう。つまり、主専攻の鷗外は北極星のごとくに不動であるが、対旋律となる副専攻のほうは揺れ動く。あるときは女性、あるときは地域、あるときは演劇へと向かう。思いつきの命名などでは断じてなく、筋は通っている。この著者が修行していた時代の学界は、作家論から文化論へと移行し、変動していく過渡期にあった。そのような中でも変節せず、自在に泳いでいくための戦略と、それを支える大局観とがこの著者には備わっていた。こう評すると、身びいきが過ぎるだろうか。

ともあれ、ここで指摘しておきたいことは、④の本書において、はじめて偏愛してきた並立の格助詞「と」と訣別した、ということだ。もとより著者の研究のスタンスや本質が変わったわけではない。むしろ「西洋百科事典」を標榜するのだから、ある意味では、これまで通りだ。比較文化・比較文学の研究と教育にひときわ熱心だった著者らしい書名である。それでは、その内実はどうか。

如上、紹介してきた通り、最初の三章が鷗外論、最後の二章が美術・演劇論となっており、従来と何ら変わりが無いことがわかる。ただし、「あとがき」の最後に次の

ようにあることを見逃すべきでない。

「『椋鳥通信』研究」という題をつけたものの、正確には「研究序説」と名づけるべきだった」

このように誠実に述べているところに、これまでの著作との違いも仄見える。

〈この分厚い「西洋百科事典」のまだ、ほんの「二、三科事典」分の解説しか書けていない。例えば、『渋江抽斎』と『椋鳥通信』の関係など興味深いテーマもあるのだが、まだ取り組めていない。ただ、『椋鳥通信』に読書人の関心を集めたい、また専門的に取り組む研究者が増えてほしい、という切なる願いを込めて、不十分ではあるものの、この時点でひとまず本という形にしたのである。〉

つまり、これは謙遜でも韜晦でもない。真率なる著者の本音、肉声として額面通りに受け止める必要がある。『椋鳥通信』の可能性を深く洞察していた著者だけに、悔しさがひしひしと伝わってくる。本当は『森鷗外と西洋百科事典』と題したかったはずなのに、『森鷗外の西洋

『百科事典』とせざるをえなかつた著者の無念を思うと、胸が張り裂けそうだ。

三

最後に、本書の可能性と限界についての私見を述べ、今後の研究展望を記したい。そして、個人的な思い出を少しだけ余白に書きつけて、この書評を締めくくってほしい。

先に引いた「あとがき」を額面通りに受け止めれば、『椋鳥通信』研究は、まだ百分の二か三しか進んでいないことになる。ジグソーパズルに喩えると、全貌が明らかになるには途方もなく険しい道りが待ち受けている、ということになるだろう。しかし、そうであれば、可能性の宝庫である、というふうに前向きに反転することもできるわけだから、この点については樂觀してよい。今後は本書のようにその全貌に迫る本格的な研究の続くことが期待される一方、注釈研究などのレファレンスとして重宝されるといった、まさに「西洋百科事典」として積極的に活用される方向性も出てくるはずだ。実際、著

者は『鷗外近代小説集』（岩波書店）の注釈に活用していた（金子幸代「注釈の発見とよろこび——『鷗外近代小説集』第三巻を通して——」『日本近代文学』第89集、二〇一三年一月）。研究を離れても、創作等の格好の「ネタ帳」にするという手もあるう。

新聞研究という側面からも追い風にできるかもしれない。富山文学の会の雑誌なので富山文学に引きつけて考えると、時代は異なるが、堀田善衛の研究には海外の新聞からの受容という観点が不可欠である。また、外国の新聞を集成した『椋鳥通信』に光を当てるのなら、国内の新聞を集成した梅原北明編纂『近代世相全史（慶應より大正までの新聞重要記事の集成）』全四巻（白風社、一九三一年）にも照明を当てる必要があるう。

他方、本書の限界については、どうか。「身内のぬるま湯な書評」などと揶揄されぬためにも、強いて心を鬼にして書くならば、第一、鷗外への過剰な拘泥、第二、受容史への目配り不足、第三、構成の甘さの三点を挙げることでできるだろう。

第一の点は、先述した標題の「の」を「と」に変換して開いていく必要があるということだ。そもそも意図を

汲むなら「無名氏」という匿名記事だったところにも鷗外の意図があったはずだ。そしてそれ以外に、鷗外は自らの意図を一切明らかにしていない。そうであるなら、著者が論証するように、すでに同人外にも顔が割れていたのだとしても——あるいは検閲逃れを企図していたとしても——、「鷗外」という固有名、ビッグネームを外すという、いわゆるテキスト論的な作業、脱構築も『椋鳥通信』それ自体の救恤のためには欠かせないのではあるまいか。作者から離れた作品の価値を引き出す上では、不可避な工程である。もっとも、その萌芽はすでに本書の内側にも胚胎していて、たとえば、鷗外と太田豊太郎を二重写しにしたⅢや、美術を論じたⅣなどに可能性が眠っているように思う。

第二の点も、第一の点と密接にかかわるが、研究史に執着するあまり、受容史が十分に覚えてこないという問題がある。たしかに、いくつかの例外を除いて、研究者は『椋鳥通信』を軽視、無視、黙殺してきた。この見方に評者も賛成するけれど、だからといって、文学者たちも『椋鳥通信』を軽視、無視、黙殺してきたと短絡することができないことは自明である。受容史と研究史は

一度、別立てで考えてみる必要があるだろう。

「椋鳥通信ほど面白く有益なものはない。簡単で多様な通信は、どの位自分に未知の事を知らしめ、既知の事を確かめ深めたか知れなかった。」（『三田文学』一九二〇年九月）と告白する茅野蕭々がその代表格だろう。この言葉は著者も引用するが、『椋鳥通信』への関心は、鷗外その人への関心によるところが大であった（三四頁）と片づけてしまっている。鷗外の追悼号での発言なのだから、鷗外その人への関心が大なのは当然のことなのに、本書の著者は「無名氏」が鷗外であることを当時の読者が知っていたということを論証しようと力みすぎるあまり、論理と全体の調和を崩してしまっているように見える。まずは当時の作家たちが研究者とは違って高く評価していたという事実を、冒頭に分厚く大書しておくべきでなかったか。極論すれば、著者が鷗外であれ誰であれ、当時において海外の情報を報せてくれるものがあつたらば、食いつく者はそれなりにいたはずなのである。

平野万里「後記」（『鷗外全集著作篇』第一七巻）を引き、「上田敏や小山内薫が『椋鳥通信』を愛読し、小山内に至っては切り抜きまでしたのには、『椋鳥通信』そのも

の重要性だけでなく、様々な海外情報を鷗外が執筆したものであったことを知ったことであった。」(三五頁)とする著者の意見にも、同じ理由により賛同しかねる。論理が逆立ちしてしまっている。鷗外が執筆したものであることを知っていたかどうかも重要なかもしれないが、それはそれとして当時の文学者が——後世の多くの研究者とは違って——『棕鳥通信』そのものの重要性は認めていたことを確認しておいたほうが大枠が見えやすくなったと思うのだが、間違っているだろうか。

さらに畳みかけておくと、斎藤茂吉のように、「近頃ねむり薬のやうなつもりで拾読してゐるものの中では、鷗外全集第十七巻に収められた「棕鳥通信」などはおもしろいものの随一であつた」(『棕鳥通信』『随筆不断経』書物展望社、一九四〇年四月)と賛辞を惜しまず、「若し欧羅巴アメリカあたりに、鷗外のやうな人がゐて、どしどし日本の日刊新聞を読みこなし、恰も鷗外の棕鳥通信のごとくに、日本の文学芸術のありさま、芸術家文人の消息が伝へられるならば、嘸愉快であらう」と夢想し、自らの随筆に生かした文学者もいた。木下左太郎、小泉信三、永井荷風、加藤周一、福永武彦、長谷川四郎らも『棕

鳥通信』を愛読していたはずだ。たとえば福永武彦は、加藤周一から鷗外全集の『棕鳥通信』を貸してもらい、療養中に読んでいる。「その面白さは一種独特で、他に比較するものがない。登場人物はこちらの知っているような偉い文士ばかりとは限らず、大小さまざまな事件がぞくぞくと繰りひろげられる。結局は文体なのだろう。ただの新聞記事と違って、つまりは鷗外の学識が簡潔な文体に滲み込んでいるとでも言う他はない。本が些か重かったことをのぞけば、これは回復期の病人に打つてつきの、無尽蔵に興味深い書物」(『鷗外全集』(『図書』一九六五年一月)と評している。この辺りの言説は、性急にならざるを得ない事情のあつた著者の眼中には入らなかったのかもしれない。ただ、どのような事情があつたにせよ、言及が見られないことは惜しまれる。

たしかに『棕鳥通信』は研究史上においては不遇なテクストであつた。したがって、それを救恤した本書の功績は多である。けれども、少数にせよ、『棕鳥通信』を評価していた文学者たちを軽視し、結果的に見えなくしてしまったことは、残念でならない。少なくとも研究初期の現段階では、研究史と受容史は別物である。その両者

を対置、対決させられなかったことは、最初の本格的な『椋鳥通信』研究として手抜きであった。今後の研究者は、全く評価されていないものを評価するというスタンスではなく、一部にしか評価されていなかったものを再評価するという姿勢で臨むのがよいと思われる。『三田文学』が、戦前と戦後にそれぞれ「新椋鳥通信」なるものを企画していた。そのような事実も思い合わせれば、先行研究を押さえるだけではやはり不十分で、受容史の確認という作業が急務であると思われる。

第三の点である構成については、事情が事情だけに仕方がないのだが、同じ主張の重複が目立つし、相互の連関がよく分からないところも散見した。また、執筆した順序と配列された順序が異なるためにかえってわかりにくくなっているところがあり、不親切であると抗議したくもなった。

とはいうものの、これらの三点をあげつらったからといって、本書の価値が減るわけではないということも、強調しておこう。このようなわずかな瑕疵の微修正については、長く闘病生活を送った末に亡くなった著者ひとりに押しつけるのはお門違いも甚だしく、後続する研究

者に引き継がれるべき類のものだ。

ともあれ、後続する研究者にとって僥倖なのは、本書がすでに存在するという安心感であろう。とりわけ付録された独字新聞『ベルリナー・ターゲブラット』との対照は、貴重な資料となりうる。同紙は、ありがたいことに今日ではインターネットで閲覧することができる。

結論として言おう。今後は本書抜きで、『椋鳥通信』を研究することはできない。否、向後の鷗外研究・比較文学研究における必携の書が『椋鳥通信』なのであり、本書なのである、と。

さらにありがたいことに、私たちの前には、山口徹『鷗外「椋鳥通信」全人名索引』（翰林書房、二〇一一年）がある。池内紀編注『椋鳥通信』上・中・下（岩波文庫、二〇一四〜一五年）もある。後続する研究者にとっては、このような基礎的な研究環境がすでに整備されているということは、何より心強い「追い風」となるう。

なお、著者による索引が存することも付言しておく。（二〇一〇年度科学研究費基盤研究B報告書「森鷗外『椋鳥通信』における西欧文化の受容・伝播の総合的研究」）また、平川祐弘編『森鷗外事典』（新曜社、二〇二〇年一

月)の「椋鳥通信」の項には、山口徹執筆のものと、金子幸代執筆のものが併載されており、参考になる。それから、『富大比較文学』には、本書に収録されていない著者による『椋鳥通信』研究の連載があり、そこから派生する学生、院生による論考も収められている。本書を補う記述や視点も少なくないだろう。結局、本書を深く理解するためには、これまでの著者の足跡を追いかけ、たどり直すことになる。冒頭に、著者の鷗外研究の集大成と評しておいた所以だ。

個人的な思い出を尽くすには、もはや紙数がなく、いずれ別に記す機会も来るだろうから、ここではごく手短かに済ますことにしよう。ドイツ文学を集中講義で池内紀(二〇一九年没)に教わり、富山大学の比較文化ゼミ(金子ゼミ)を金子幸代(二〇二二年没)の直々のご指名により引き継いだ評者個人にとって、『椋鳥通信』という書物は二重の意味でかけがえのない「遺産」なのだ、と。

池内先生、金子先生、多くのご学恩をお恵み下さり、ありがとうございます。合掌。(富山文学の会代表)

研究論文

富本一枝「貧しき隣人」を読む

黒崎 真美

1、尾竹紅吉から富本一枝へ

一九一一年九月に『青鞥』が創刊した。日本画家の叔父尾竹竹坡の家で、叔母宛に届いた『青鞥』の購読勧誘状を目にした一枝は、『青鞥』に魅了されのめり込んでいく。翌一九一二年一月に入会した一枝が、最初に『青鞥』に登場するのは四月号の表紙絵で、筆名は「紅吉」を用いた。しかし、一枝の青鞥社在籍はわずか一〇か月あまりでしかない。青鞥の、新しい女たちの活動は、「注目に値する」（島村抱月「文芸時事」『読売新聞』一九一九・三）や、「雑誌『青鞥』の発行へ、伝うべき現象の」（『萬朝報』一九二一・一・一）などと、その発行当初から注目されていた。そのため、一枝が広告費を得るために行った銀座のバー鴻巣での出来事は、五色の酒事件⁶として、吉原大文字楼での社会の暗部で働く女性の取材は、吉原登楼事件⁷として、また平塚らいてうとの関係

も、同性の恋⁸として、面白おかしくスキャンダラスな記事にされた。不用意に「五色につき分けたお酒を青いムギワタの管で飲みながら」（「あねさま」と「うちわ絵」の展覧会）『青鞥』一九二一・七）と書いた一枝が蒔いた種ではあったが、青鞥社全体の醜聞として世間で取りざたされたことで『青鞥』の発行部数が減少し、青鞥社社員の反発も買って退社に追い込まれてしまう。

青鞥社での活動は短期間であったにもかかわらず、一枝は強烈な存在感を示し、『青鞥』の作家尾竹紅吉の名が人々の記憶に刻まれたことは周知のことである。紅吉の名は、一九一三年八月以降目になることがなくなるが、一枝はこの後も女性活動家として、作家として長く活躍する。

青鞥入社後、表紙絵を依頼された一枝は、アイデアを相談するために、『白樺』（一九二一・一）で目にしたイギリス帰りの画家富本憲吉を奈良に訪ねたのは一九二二年二月であった⁹。この出会いから二年後、憲吉からの熱烈な求愛によって結婚し、富本一枝となる。

尾竹一枝は一九一三年四月二〇日に、富山市越前町で日本画家尾竹越堂の長女として生まれた。尾竹親『尾竹

竹波伝 『その反骨と挫折』（一九六八・一一 東京出版センター）によれば、越堂は、もともと新潟の紺屋紺倉の長男として生まれた。苦しい生計を助けるために「明治一八年六月十七日に発刊された「絵入り新潟新聞」に挿絵を描いていた」（同前）といい、新潟在住当時から画家として身を立っていたようだ。また、「若い頃、自由民権運動に加わり、板垣退助の自由党の考えなどにも共鳴して、東奔西走、いわゆる行動派の青年」（同前）としての側面も持ち合わせていたという。新潟を出て、三年間の東京での修行を経て一八八九年頃に富山に移り住み、富山藩の高禄武士の娘ウタと結婚する。そして富山で、弟竹坡や国観と共に尾竹三兄弟として、売薬版画や富山日報の挿絵画家として知られるようになる。

竹坡と国観は、一八九六年に修行のために上京して、しばらくしてから根岸に居を構えた。一枝の祖父母倉松・イヨ夫妻が成功した竹坡・国観の所へいつから身を寄せたのかは不明だが、一八九九年の小学校入学の際に、一枝はこの祖父母のもとから根岸小学校に通ったという。そして同年八月の富山大火を機に越堂は一家で上京し、その三年後には大阪市南区に転居している。一枝

は幼少期の六年間を富山で過ごしていた。

2、富本憲吉との結婚と安堵村での生活

一九一四年七月十二日から続けさまに届いた憲吉の誘いの手紙に応え、一枝は八月一日に鹿沢温泉に一週間ほど滞在した後、九月から東京下谷区茅町二の一四で、憲吉と二人の生活を始めた。越堂は一枝を自分と同じ画家として育てたかったので結婚に反対したが、その許しを得、一〇月、尾竹一枝は陶芸家富本憲吉と結婚した。「結婚する前と結婚してから」（『婦人公論』一九一七・一）に、

千九百十四年十月、私は夫と結婚した。突然、この私の上についたものは、遂に私の転移期とはなつた。（略）

私は、私の最も好むもの、尊敬するものを彼の中心から見出した。私は彼の芸術を尊敬し、より高い理性、すぐれて進める偉大なその性格の中に一つのものとして結ばるゝ事を深く喜んだ。

と記しているように、尊敬する才能にあふれた憲吉と結

婚することは、一枝にとって大きな喜びであった。まして憲吉の、

アナタが家族をはなれて私の処に来ると思はれるが、私の方でも私は独り私の家族をはなれてアナタの処へ行くので、決して、アナタだけが私の処へ来られるのではない、例へ法律とか外観で、さうでないにしても尾竹にも富本にも未だ属しない、ひとつの新しい家が出来るわけである。

そう考へて居て貰ひたい：（山本茂雄「富本憲吉・青春の軌跡——出会い・球根・結婚までの書簡集」『陶芸四季』一九八一・三）

という言葉は、旧来の夫婦関係とは全く異なる、対等な男女の上に成り立つ関係性の提案であり、一枝にとって理想的な結婚であったといえる。二人はしばらく東京下谷での新婚生活を経て、翌年三月に憲吉の故郷である奈良県の安堵村の実家に転居する。富本の家は、

法隆寺から一・五キロほど東南にあるその家は先祖代々庄屋を勤める旧家で、一時は村全体の九割に当る年貢米を倉に納めていたともいわれるほどで、まさに堀をめぐらした豪家だった。（高井陽・折井美

耶子『薊の花 富本一枝伝』一九八五・六 ドメス出版）

という古い風習の残る安堵村の旧家であり、一枝の結婚生活は一枝の思い描いていた結婚生活とはかけ離れたものだった。

「私達の生活」(『女性日本人』一九二〇・一〇)には、安堵村での家族の生活が次のように記される。

二三日雨が降りつゞいて洗濯物がたまる時がある。そんな時、私と女中が一生懸命で洗つても中々手が廻りかねるそれを富本がよく手伝つて、すゞぎの水をポンプで上げてくれたり、干すものをクリツプで止めてくれたりしてゐるのを見て百姓達はいつも冷笑した。「いゝとこの主人があんな女子のやる事をする」といつて可笑^{をか}しがる。夕方、母の家に^{うち}子達をつれたり背追つて歩いて行つても不思議がる。この土地ではまだくゝ家長万能で、主人は畳の上で飯を喰ひ、あとの家族は板間で喰ふのださうな。その中に住む自分達を、この人達が見れば全く可笑しいのだ。可笑しいと云ふより、本当に危険視してゐたかも知れない。同じ村に住む自分達の親類になる人さへ、

私達の生活は過激派の生活だと言って、自分の若い息子をこゝに遊びに寄すことをかたく禁じてゐるのだ。私達が一緒に、一つの食卓をかこみ、同じ食物で食事をすまし、一緒に遊び、一緒に働くことが危険でたまらないのだ。私達は、その人達の考へこそ可成り危険だと思ふのに。

〈家長万能〉の前近代の男尊女卑が残る安堵村で、男性の家事作業が〈危険視〉された。〈過激派の生活〉として親類から交流を避けられたというのだ。尾竹の家では母から武家の作法も学んできたが、一枝にとって衝撃だったのではなからうか。まして、新しい女、としてのその行動が世間の注目を浴びたほど自由に思考や行動をしてきた一枝には、窮屈極まる慣習だったはずだ。食事にしても、夫と共にとることはできず、それを憲吉が嫌ったという。「夫はあくまで戸主の座で食事」（「青鞥前後の私」松島栄一『講座女性―女性の歴史―』一九五八・三三―書房）をし、嫁である一枝は「夫と離れたところに坐って食事」（「青鞥前後の私」）をせねばならず、家族で同じ食卓につくことはできなかった。

一九二三年三月の『婦人公論』に掲載された小説「貧

しき隣人^四」には、一枝と憲吉の安堵村での生活を彷彿させる日常が描かれている。

夕飯がすんで、あかるい電燈の光りをみんなが受けながら、一つの卓によつて、美しい葡萄の皿をいめいかへよせて食べてゐる

ここには家族が一つの食卓を囲んで、ごく普通に食事をすする日常の生活が描かれる。新しい夫婦の關係性を理想とした二人は、新居を建て、姑に気兼ねなく旧來の慣習にこだわらない、西洋風な新しい生活をはじめた。その日常の風景が描かれたのが、小説「貧しき隣人」である。

日ごろは仲の良い主人公夫婦だが、お篠婆から買った「草履」がもとで、仲違いをしてしまう。草履があふれて物置を塞いでしまい、謙造から言いつかつた提灯を、女中の良は取り出すことが出来なかつたのだ。謙造は「短」で「小さい事にでもすぐむきにな」り、すぐに「癩^{しかく}」をおこす。「私」が「草履を買ひためた」ためだと指摘すると、ますます「心をまげて怒」ってしまう。すると、「私の心も露骨に、そのわけのわからない夫の腹立たしさに悪意」を持ち、二人の「争ひ」が起るとい

う。それは「すつかり燃やしつくすまで焰を立て、荒狂ふ」のだ。翌日まで「不快な出来事に未だこだわって、ぎこちない気持」のまま、「必要な言葉さへなるべくさけ合ひ使はず」に、「良や子供達を仲に立て、用を足」すという。そして、「子供つぼい謙造の困ったあげくの」言葉を聞いて、喧嘩していたことを「つひ忘れて笑つてしま」い、「全くたあいなく仲直り」をするという。

夫婦喧嘩、でさえも新しい。常に妻が夫を立て夫の言葉に従うという当時の一般と二人の関係性は全く異なる。男尊女卑や家父長制の強く残る社会において、男女が対等に「争い」をし、女性は男性の一方的な怒りには屈しないのだ。新しい関係性の夫婦の日常が描かれているといえよう。

安堵村の憲吉の生まれ故郷で一枝は、地方の旧家という旧来の風習が強く残る環境に苦労しながらも、新たな夫婦の生活スタイルを示した。「私達の生活」や「貧しき隣人」からは、一枝・憲吉夫婦の初々しい、新しい夫婦像、がうかがえる。

3、貧しき隣人

江戸時代に大和国には約七十ほどの被差別部落があったという（奈良県立同和問題関係史料センター『奈良の被差別民衆史』二〇〇一・三 奈良県教育委員会）。その多くは「枝郷」として「本村」の支配を受けていたようだ。そのうちの一つである平群郡風根村は、「一〇〇軒を超える集落」で、「大規模に農業を営んでいた上に、幕末の安政四年（一八五七）の史料では年間一五万足の草履を生産していた」（同前）といい、経済活動が活発で、独立をめざす争論も激しかったようだ。周辺の村人の部落民へ対する忌避感情は激しく、一八七三の東安堵村の小学校設立に関する風根村から奈良県に宛てた願い書をみるとそれが顕著にあらわれている。「新平民之私共故何となく嫌忌之色相見へ候」（井岡康時「近代奈良県の地域社会と部落差別をめぐる問題点」『研究紀要』二〇〇五・三 奈良県立同和問題関係史料センター）とあり、本村民の枝郷民への「嫌忌」が強くあったため、小学校を統合できるとような村民感情ではなかったことがうかがえる。そのため、比較的経済活動が盛んだった風根村には、「部落

学校として明倫館という小学校が建設された」（同前）という。

「特殊部落」民への差別感情は、「貧しき隣人」の中でも次のように描かれる。

私達の村の人々も、K村の人々を無暗に嫌がつてゐた。小学校の生徒等がその部落の子供にゆき会ふたびに「穢多」とよばずには過ぎなかつたし、ことごとくにK村と私達の村人は小さい事にでも争ひあつた。

子どもの感情には、大人の感情が直接的に反映されている。子どもの時からの長年にわたる忌避感情を払拭するためには、相当の時間が必要であろう。この村の「地主」は、「K村の下駄直しに出逢つて、私も朝の挨拶を返へした」ことを、「かげで」冷笑している。「あれの先祖は牛や犬」であるという良の部落民へ対する認識も、多くの村民たちの感情といえるだろう。「穢多と云ふのは獣」と同類で人間ではないという差別感情が、差別の根底にあることをうかがわせる。そんな中で、「私」と謙造は、

この地方の地主階級の人達が、如何に自分の事ばかりより考へてゐないか、善とか正義についてどんな

に鈍感に出来上つてゐるか、亦、殊更それに鈍感をよくそほつてゐるか、貧しい人々をどんなに自分等を

区別してゐるか

を語り合い、お篠婆の訪問を親しみを持って迎えている。「私」と謙造夫婦のお篠婆との交流はかなり特殊なものとして周囲から見られていたはずである。

「私」と謙造夫婦の家に、週に数回、草履を売りに訪れる「特殊部落」に住むお篠婆は、「シヨボシヨボした、しかし貧乏故の狡さうな眼、顔中皺でひだどれてゐる蟹のやうな角ばつた陰気な暗い打沈んだ顔」をした八十歳に近い老婆である。「汚くよこれた、あかのためにびか／＼に光つてゐるよれよれの財布」を手にし、「汚れて泥々」な「ぼろきれ」のような「粗末な装」で、「好意につけ込んで」「断られることは決して無いと信じて」、草履を売りにやつて来る。また、この老婆は、

この村の北による小さいH山の麓のK村と呼ぶ割方大きい特殊部落の者で、その村でも殊に貧しい家族の一人であつた。家族といつても、年中病身で、わづかに室内の真似ごとのやうな手仕事さへつゞけては出来かねる程哀れな彼女の息子と二人暮しだつ

た

という。穢多村である「K村」に住む老婆が、病身の息子を養いながら草履を売って生活をしているのだ。息子との生活を守るために、「雨の日でも、風の日でも」「おのれの身体の二倍もあるやうに思へる重い荷」を背負って売り歩くのである。

もちろん、「私」は彼女の来訪を手放しで歓迎しているわけではない。お篠婆の「胸をつくやうな臭気」や「哀願がんと強情がうじやうさ」「あつかましさ」に不愉快に感じ、「可哀想かはいさうだと思ひながらも、なんとなく面憎つらく」感じてもある。しかし「何かきたないもののやうによけてゐた事」を恥じ、「そんなきもちを憎悪」するという。「私」が「母達と別れて家を持つてから」八年余りのお篠婆との「交渉かうせふ」は、「まるきり憐憫れんびんとも言ひきれない」「思ひやり深い心持」を持つて行つていたという。「彼女を温い気持でよびかけ」る「私」たち夫婦の家への訪問が、お篠婆の「大きな満足」と「よろこび」だったに違いないと考えている。

貧しさが彼女をこんなにまで気の毒にしてみましたのかと思つて変に嫌な気もした。この憐れな人間に

対して私はどんな不快いな眼に逢つても、どうかして暖い心を失したくないと思つた。憎むことがあつてもそれをゆるしてゆきたいと思つた。

「私」は、貧しさゆえに「真心とか愛」よりも「一枚の銀貨」に心奪われるお篠婆の苦しみを理解しようとする。「私」や謙造は、「自分達が彼女のやうに困る時があるまで」、貧しいお篠婆に「これ位ひのこと」をすること「が、この地上に等しく生れ育てられてゐる人間達がお互ひに感じ合ふ義務であり、責任」であると考えているのだ。お篠婆が、持参した品物とその何倍もの価値あるものと取引が出来ること「味をしめるやうになつた」のも「私」たちが教えたことであり、お篠婆を卑しくしたのは「私」たちであるという思いを強くする。

「特殊部落」の住人に「温かい言葉」をかけることなく、挨拶を交わすことすらもせず、まるで「獣」のやうに扱う振る舞いが、彼らの心を「卑しく」するのである。また、彼女たちは貧し過ぎるが故に、生きるために厚かましく狡猾になつたのだ。その卑しさや狡猾さ、厚かましさを彼女らに与えたのが忌避する側だと指摘している。

「貧しき隣人」の二年前に発表した「地にすめるもの」

『女性日本人』一九二一・二には、「白鯰」の女性との遭遇を書いている。「白鯰」の女性は、「乞食でないと言ふだけで、全く貧しい姿」をして、「まるで栄養の足りてゐない」男を背負っていた。彼女を見て「自分」は「気の毒でたまらなく」なる。周囲の「二人揃つて賑ふところに出たら却々沢山のみいり」という揶揄に、「自分」は、「お互ひが人間でゐてそんなひどい事を平気で大胆でよく出来る。それでも人間ですか、」と腹を立てる。「私」は外見的な違いに興味を持って「見る」ことはしても、相手に対しての礼儀は失わない。そして、

世に生れたものの中で不具者は最も不幸な人達だ。その上不具者でゐて貧しい者位ゐる気の毒な事は無い。その人達は不幸な境遇から、跳ね上る力さいなへのだ。苦しみながら、もがき通して生きてゐるのだ。すがりつくものさへ滅多にない暗い淋しい生活を思ふと、その人等に比べて自分達が肉体上に一つとして欠けたものを有たずに、しかも喰ふに困らず、きるに足つてゐる事をよるこんだり幸福に感じたりする事さへ恥ぢねばならない

と、その不幸を憐れみ、自らの幸福を恥じる。さうらに、

「完全した自分等の身体をその不幸な人の前で特に誇り、「声高かにその不具者を辱かしてゐる人間」を憎悪する。罵詈雑言に耐えられなくなった時、「自分」はマタイ福音書第七章の「汝等犬に聖き物を與ふる勿れ、また豚の前に汝等の真珠を投げ與ふる勿れ、恐らくは足にて之を踐み、ふりかへりて両曹の噛み破らん」を思い出す。人に対しての礼節をわきまえない、真心を持たぬ人たちには何を言つても無駄なのだ、身近等を怒りを鎮めるしかないのだ。貧しく、しかも「不具者」である女性に対しての憐れみや同情の気持ちは、「貧しき隣人」にも継承する。

また、一九二一年一月の『女性同盟』に掲載した詩「自分にきかす言葉」の一節に、

真心と真心がむすばつた時

よろこべ

これが本当にうれしいことだ

このよろこびを

神も本当にうれしがられる。

*

(中略)

*

さびしさにたへることだ
そこから力が湧く。

信仰が生れる。

隣人を本当に考へる。

さびしさを知らずにゐる時、

自分はたしかに悪くなる。

とある。「真心と真心」の結び付きが喜びであり、「神」をも喜ばせる。「さびしさ」に耐えることから力が湧き、信仰心が生まれ、隣人を思うようになるといいきかす。

お篠婆の貧しさを思うとき、「私」はルカ福音書第六章「貧しきはよろこびなり」と教えられたことを思い出す。

「私」はルカ福音書第十章「自分の如く隣人を愛せよ」という言葉通りに、穢多のお篠婆を愛することが出来たら「どんなに心が平和だらう」と、自らを恥じるのである。癩癩を起した謙造は、自らを「安つばい偽善者」と侮り、「バイブルの事もわからなければ聖人の心なんかわかるものか」と自分を卑下する。貧しい隣人とどう交流するべきか思い悩む二人の心情が垣間見える。「貧しい人々を心で憐れんでゐるだけではなんにもならず、お

篠婆が「どんなに自分たちの好意につけこん」だとしても、それを「心よくゆるして行くのが本当」なのだ。二人は、「貧しい隣人につくす自分達の心」を持って彼女たちを愛したいと考えているのである。

聖書の教えは、博愛の精神の根幹をなすものとして、一枝の多く記述の中に見られる。

4、隣人を愛せよ

第一次世界大戦後の好景気の後、日本経済は物価高騰の反動で恐慌に陥った。貧者と富者の格差が広がり、一九一八年の米騒動を契機にして社会運動が活発化した。

一九二二年には全国水平社が創設され、部落解放運動が起こっていた。部落差別の問題を間近で見、貧富や男女差別を肌で感じていたであろう一枝が、そんな社会の動きに無関心でいる筈がない。「母親の手紙」『女性』一九二二・一二)の中で一枝は、

この人間の住んでゐる社会にはどつさりな不公平があるのに第一気がつきませう。働いても働いても、食べる事だけしか出来ない人達、否、食べる事さへ、

生きてゆく保證さへ始終おびやかされ通しである人達があります。自分達は少しも働かずに、お腹いっぱい美味なものを喰べ、飽く程美衣宝玉にとりまかれて実に安逸なきらびやかな生活をしてゐる人間もゐます。

と、幼い娘たちへ社会の「不公平」を説く。また、「心にきく」(『女性同盟』一九二一・三)の一節には、

かせいでもかせいでも

貧乏がくつついてゆく人

勉強したくても

出来ない人

金で「生命」^{いのち}が助かる人

魂を売る人、からだを売る人

これを助けるのが

本当の金持

金持の義務。

自分を貧しくして

人を富ます人

人間みんなのために

善い計画をする人

働く人

これが金持

本当の金持。

と、貧者を救済する者が「本当の金持」と書く。「人間みんなのために」働き、救済する心が「真に美しい」という。一枝は社会の不公平に心を痛め、貧民の救済に心を傾けている。

「貧しき隣人」の中で「私」は次のように述懐する。

自分達は幸福だ。非常に幸福だ。この二人の幸福な人間にはさまれて腰かけてゐる気の毒な老いた隣人は、それに比べてなんと云ふまづしさだらう。貧乏のどん底、社会のどん底にゐて、ただ生きてゆくだけにあへぎつゝ苦しみつゝ幸福を知らず、よろこびを知らずに生きてゐるのだ。

穢多であるお篠婆に親しみをもつて交際し、その身を案じることが出来る謙造夫婦は「幸福」であり、その上に安住している自分たちを「すまなく思ふ」(「心にきく」)ことができる夫婦として描かれている。

住田利夫は「青鞥社の女性と部落問題(一)——富本一枝(尾竹紅吉)と「貧しき隣人」について」(『部落問

題と文芸』一九九六・三)の中で、「貧しき隣人」に描かれた「思想と行動」は、十八世紀イギリスで巻き起こった博愛主義運動と共通すると指摘する。「自己の慈善行為を最大限に完全燃焼することで、人生の喜びを身にする」(同前)と論じているように、「金持」である二人は、お篠婆を「貧しい隣人として出来るだけあつたかな心で愛してゆ」く真心ある人間でありたいと願い、そのために草履を買い続ける。だから「俺達はいつまでも貧乏」なのだど苦笑することに喜びを感じているのである。

また、「済生会とか、何々会とか、慈善を標榜（へうぼう）してたつてゐる団体の仕事が大き目の網で小魚をすくふやうなものである」と社会保障の不備を指摘し、「こんな不正なことを何故人々は気づかずにすましてをれるのだらう」と憤る。「こんなに老いばれ、衰へつかれてゐる彼女にいつまでこの労役（らうえき）をつづけさせてゆくつもりか」とお篠婆の身を案じ、「喰ふ保証だけでも村役場からするのが当然だ」と、社会福祉の必要性を話し合っている。また、金持や役場の、救済を受けることを「不名誉だと未だ思はせるところ」や「有難く思へ、お前を助けてやるぞと云ふ横柄（おうべい）さ」にも問題があると指摘する。

片岡清子は「文芸の散歩道 生き方を模索する葛藤の魅力 『貧しき隣人』富本一枝著」『部落』二〇〇一・一二)の中で、

貧者に対する偽善的行為だと決めつけられないこの小説の魅力は、さまざまな思想の影響をうけながら葛藤し、前向きに生きる一枝の生々しさが表れている

と、二人の行動を「偽善的行為」ではないとし、

ヒューマニストたらしめし、前向きに生き方を模索した一枝の人生を予想する若い芽吹きが感じられる。

と、貧者に思いを寄せる一枝の姿を好意的に受け止めている。一九一五の資産家と部落民との関係についての風俗調査によれば、部落民に仕事を与えたり、貧民救済を行ったりする資産家もあった五という。一枝・憲吉夫妻はそんな資産家の一つであったのかもしれない。聖書やトルストイや様々な書物から、『青鞥』で関わった多くの人から、また父越堂から受け継いだ正義感から、一枝は独自の人道主義を模索していた様子がうかがえる。

「貧しき隣人」では、「自分の如く隣人を愛せよ」とい

う教えを実行しようとする姿が描かれる。富者と貧者という絶対的な格差は如何ともしがたく、ならば「金持」として「貧者」と向き合って手を差し伸べてゆこうとする。不公平に満ちた生活の中で、誰に対しても真心を持つて手を差し伸べる豊かな愛情を見出すことができる。

部落差別の問題、貧困問題、社会福祉の問題、封建的家族制度の問題、信仰や思想の問題など、「貧しき隣人」に描かれたテーマをあげるときりがなく、いろいろな角度から考察が可能であろう。様々な問題意識が詰まったこの作品は、富本一枝の人物像を分析するための第一歩としてたいへん興味深い作品である。

注

- 一 渡邊澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』（二〇〇一・三 不二出版）には、『白樺』（一九二二・一）掲載の南薫造「私信往復」が、一枝が憲吉に関心を持ったきっかけだったとある。
- 二 高井陽・折井美耶子『薊の花 富本一枝伝』（一九八五・六 ドメス出版）に、「東京で三年、生活のために車夫などをしながら絵の修業をしたのち、富山に移ったものを思われる。」とある。

三

『薊の花 富本一枝伝』に、「兄弟の両親、倉松夫婦の上京はいつか不明だが、画業が繁盛し根岸に一軒の家をもつようになって富山から出てきたのではなからうか。」とある。

四

本文引用は、すべて初出誌『婦人公論』（一九二三・三）による。

五

井岡康時「近代奈良県の地域社会と部落差別をめぐる問題点」『研究紀要』二〇〇五・三 奈良県立同和問題関係史料センター

『久遠の自像』についての調査報告

— 詩人・高島高の多面性

金山 克哉

一、『久遠の自像』の全体像について

『久遠の自像』は公式には出版されなかった詩と散文集である。今回、富山県滑川市立博物館の協力を得て調査することができた。同時に詩集『人生記銘』についても閲覧することができたが、今回は『久遠の自像』に焦点をしばって報告したい。『人生記銘』の報告については稿を改める。

『北方の詩』（昭和十三年七月一日 ボン書店）、『山脈地帯』（昭和十六年二月二十日 旗社出版部）という二つの詩集をすでに持つ高島高であるが、この『久遠の自像』は次なるステップに進むために必要な詩文集だったようである。奥付には左記のようにある。

非売品

印刷 昭和十六年十一月十五日

発行 昭和十六年十一月二十五日

著者 高島 高

発行者 北方の詩の会 富山県滑川市堺町八六六

番地

印刷者 新夕 正朝 富山県滑川市河端町五三

○番地

印刷所 滑川謄写研究会 富山県滑川市河端町五三

○番地

その構成は次のようになっている。

「序詩」 吉田 一穂

「序に代へて」高島 高 昭和十六年九月二十五日

一、山脈地帯

二、白銀繁生を悼む

三、寂光

四、孤独なる日記

五、山の秋

昭和十六年は、高島高が三十一歳の年。

伊勢功治『北方の詩人 高島高』（二〇二一年三月三十日 思潮社）の「年譜」によると、この年は第二詩集『山脈地帯』を発行し「帝大新聞」「三田文学」から好評を得ている、とある。このとき高は郷里滑川にて医業を継いで開業しており、北川冬彦編『培養土』や『現代日本年刊詩集』『昆仑詩集』等に詩を収録している。かつ、「年譜」には「十一月 昭森社から出す予定だった詩散文集『久遠の自像』を開戦に続く応召により出版に至らず、謄写刷りで刊行（散文「寂光」）掲載。約三十部」とある。また、この年の十一月に父・地作が享年六十一歳で死去している。『久遠の自像』が編まれたのは、東京を去り、郷里滑川にて医師であった父の後を継いで開業しながらも、自宅の離れを「北方荘」と名付けて文学の活動に取り組んでいる時期である。東京時代の文人ともつながりながら、「高志人」と関わるなど、富山でも新たな活動の幅を広げている高島高。翌年には翁久允主宰「高志人」の詩の欄の選者にもなっている。しかし時代は戦争に向かい、昭和十八年には軍医として応召し、陸軍東部

第四十八部隊石坂隊に入隊、金沢陸軍病院出羽町分院に配属され、フィリピン、シンガポール、シヤム（タイ）、ビルマ（ミャンマー）を転戦することになる。

『久遠の自像』はそのような時代にまとめられた。以下、その内容について紹介しながら考察を加えてみたい。

二、詩「山脈地帯（第一章～第十章）」について

詩集『山脈地帯』には詩「山脈地帯 第一章」のみが収録されている。第一章しか収録しなかった理由を高島高自身は、「作者は第一章、第二章、第三章、夜明けを意図せる第四章まで書きしが、意に満たず後日を期しここに第一章のみを発表す」と詩篇のあとに附記している。この『久遠の自像』では残りの「第二章」から「第十章」までが収録されており通読することができる。この詩はすべての章が物語風に書かれている。ほとんどの章がまずは風景描写から入り、次に思索の内容が述べられ、最後は再び風景描写に戻るという「風景↓思索↓風景・物語の進行」というフレーム・ストーリーの形式がとられている。

登場人物について左記にまとめてみる。

「僕」

雪山に山小屋を持つ。絵描きを東京から呼び、北方の山脈地帯の絵を描かせる。この雪山の谷で亡くなった「健吾」なる天才画家を真の芸術家として尊敬している。また、雪山で遭難して亡くなった「美也子さん」とかつて恋仲であったことをほのめかす。

「美也子さん」

美貌の人だが雪山で遭難し、白骨化した状態で発見された。北の人々は子供を産んで死んでいくだけで、恋愛を恋愛として考えることもしない習俗の中に生きていたが、「美也子さんだけは考えた」という。しかし、山脈地帯では考える者は生きてはいけない。自然から復讐を受けて命を落とした知的な人物として描かれる。

「君」 || 「柴尾くん」

東京から「僕」に呼ばれて山脈地帯の絵を描きにき

た画家。中堅画家で将来を有望視されている。

「安岡健吾」

天才画家と称されるが、かつてこの山脈地帯の谷で命を落とした。「僕」や「柴尾くん」から尊敬されている存在である。

「作一」

山小屋の番をしている者。火をおこしたり犬橇の管理をしたりしている。「僕」の指示に従う。

「房太郎・房代」

雪に耐性をもった犬。房太郎が雄、房代が雌。「僕」から見て、その橇を引く懸命な姿は美しく、また、咆哮する姿は原始の狼の血をたぎらせているように見えている。

次に「第一章」から「第十章」の内容を要約してみた。

(第一章)

詩集『山脈地帯』に載ったのはこの第一章のみであるが、第十章までを通じて冷却の山脈地帯の厳しい寒さが描かれる。また、「僕」が「君Ⅱ柴尾くん」に語りかけるスタイルで全章が進行する。二人は山脈地帯の中で一週間過ぎ、その風土を詩に書いたり、絵に描いたりしようとしている。

かつて寒冷の山脈に入ってしまった「美也子さん」は、山脈が発する寒冷の刃によって命を落とし、白骨化した状態で発見される。なぜ「美也子さん」が一人でそんな危険な行動に出たか、それは「考えた」からだという。生まれては死に、生まれては死に、という命のくり返しを自然の中で行う北方の習俗、つまり「自然」というものと、思考することによって自己を認識する「近代的な知性」との相克が描かれている。「僕」と「君Ⅱ柴尾くん」は不安定な雪の上をアトリエに向かう。

(第二章)

雪の世界のことを「北極」と呼び、そこに住む人々は「北極的魂」を持つとする。「僕」は不屈と暗鬱をまとつ

た「北川冬彦」を尊敬していると述べつつ、「君Ⅱ柴尾くん」との対話を続けていく。この山に住む人々は危険という文明を持っておらず、本当の知性人は、危険すらも自分自身の中に消化していて分別で頭をいっばいすることはないという。怪しげな知性をひけらかしてはいけけない。知性は一度投げ出されるべきであり、自己欺瞞や偽善から自由になることこそが大切なのだと説く。二人は、吹雪の中、一歩ずつ山小屋のアトリエに向かう。

(第三章)

場面はアトリエの中に移る。北側に窓があり、山を一望できる。「僕」は山の景色の中に「原始」の輝きを見る。そして、「原始」の中にこそ人間の本质があると言う。榮誉欲しさに嘘っぱちの人生を送ることほど無意味なことではなく、芸術の本质に食い入ることこそ重要だと説く。「君Ⅱ柴尾くん」を東京から来た優れた友人とし、冬の景色をキャンバスに描いてくれることを期待している。

(第四章)

画家の安岡健吾が登場する。安岡はかつてこの山で谷

に落ちて死亡した天才画家であり、「僕」も「君」柴尾くん」も安岡のことを尊敬している。「僕」は安岡の中にある「暗さ」を見だし、そこに魅力を感じている。その「暗さ」とは、「自己の節操と世間に容れられない自己に対する偉大な諷刺」によるものであり、「知性的にすぐれた男のもつもの」であるとして安岡の中にダンディズムのようなものを感じている。冬山での死さえも「はなばなしい大制作」であるとする。けっして裕福ではなかった安岡だが、死してなお思い出されることこそが芸術家としての勝利であると評価する。そして、「われわれ」芸術家は「一時でも身を売るようなときがあってはならない」とする。そして、「君」柴尾くん」に安岡を呑み込んだ谷を絵に描くよう依頼する。

(第五章)

犬橇を引く犬は樺太犬で体が大きく「犬の中の高島高」であると表現されている。雪に対する耐久力と感覚の一種を持っており、雄は「房太郎」、雌を「房代」と名付けている。この命名は「作一」(アトリエのある丸太小屋の使用人)による。犬の勤勉な姿から、人は筋金が入って

いなければならぬ、骨組みがあるかが問題だ、とする。仮に世間から評価されずとも「無冠の大王」たるのが芸術家だとする。真の芸術家とは「同一的矛盾的自己をあくまで推し進める人」であると定義する。また「小乗」(個人的達成)ではなく「大乘」(利他救済の達成)こそ大切だとする。

(第六章)

再び犬が橇を懸命に引く姿に感動し、協力し合い自分の仕事に全身全力を注ぐ姿に感動している。そして、詩心のあるものにはどれも権威があるとす。それに反して、無意味に威張りくさった外面ばかり気にする生半可な形式主義者は評価できない、とする。あらゆる夾雑物・外来物を排したわれわれ自身の赤裸々な意志こそが重要だとする。そして、安岡が死んだ谷に向けて橇を走らせる。

(第七章)

「××谷」は純粹芸術家である安岡の墳墓である、とする。そして安らかな死、眠りを祈り安岡を追悼する。

「美也子さん」にしても「若い、しかも美しい肉体を捨てるために必死になって山へ登った」と「僕」は考える。そして「美也子さん」の行為を、「人間の純粋な肉体の詩」とする。死を覚悟した人間の強さ、戦う力、奮戦力に感動し、房代（雌犬）の中には狼のような原始の力を見る。

（第八章）

一歩一歩歩むことで人間が鍛えられていくことの大切さを説く。人格・風格が備わり、ゆくゆくは「鉄の風格」と呼ぶべきレベルに達すると言う。日が暮れて冬山の夜が来る。自然の観察は古くから偉人たちがおこなうところであった。

（第九章）

山の夜明け。「原始」のひとつときとしてその輝かしい風景を評価する。夜が明けて光りが指す風景を、「復活した山脈」＝「復活した人間の威容」と表現する。その朝明けは「哲学」の一部であり人間に「勇気」と「覇気」を与える、とする。

（第十章）

法（ダルマ）や理論にとらわれているうちは本物ではない、それらを越えていくことが大切なのだ、とする。風景の中にある「不動の真理」こそ、尊いのだ、とする。そして二人は山を下りる。

（考察）

「第一章」については拙論「北方の冬 高島高論」（「群峰」第三号 二〇一七年 富山文学の会）で触れたが、「知性・都会」と「自然・北方」が対比されており、近代人の生き方と自然の荘厳さの相克が描かれる。「第二章」以降、芸術家のあるべき姿が描かれ、それに反するものとして邪な知性や自己欺瞞、虚栄心に支配される人間の姿が対置される。また、「原始」の生命の美しさも芸術の真髓に通じるものとして認識されている。天才画家・安岡健吾の死を悼み、その芸術性に敬意を示しつつ、「僕」は芸術家としての己の矜持を詩の中で語る。

全体的に長い詩である。高島高が「第一章」のみを詩集『山脈地帯』に載せ、他を載せなかったのはなぜか。その理由として、「冗漫を避けた可能性が考えられる。」「第

二章」以降は「僕」の芸術観が中心となった語りとなっている。また、芸術の純粹性と対人圏の猥雑さの対置が繰り返し述べられている。詩的な余韻というよりも、そこにあるのは徹底した芸術観の発露である。思想や美学を重視するならば意に満たなかった「第四章」までを含めて評価するべきかもしれないが、詩作品の完結性と余情を評価するならば、「第一章」のみを採るという発想も理解できる。いずれにせよ、「第十章」までを通読すれば、高島高の芸術観・倫理観がはっきりとわかるというものだ。また、自身の芸術観・倫理観を示す方法として、〈北方〉を舞台とした長大な物語風の詩という形式を採用したことを忘れてはいけない。この詩は、〈北方〉に原始的な生命力を見いだすことよって、夾雑物を許さない自らの芸術観を披瀝している思索的な作品である。

三、詩「白銀繁生を悼む」(一九三四年 昭和九年 文芸と映画の雑誌「オアシス」)

白銀繁生(しろがね しげを)は昭和九年七月十九日に死去。高島高の詩集パンフレット第一集『太陽の瞳は

薔薇』(昭和七年 私家版・伊勢功治『北方の詩人 高島高』P六六〜P七三に詳細な記述あり)にプロローグを書いてくれた友人である。高の詩を白銀は「これは素焼きのやうな荒い肌だ／なぜかといふに、かれの芸術が、彼の気質に根ざしているからであらう」と評した。高は白銀のことを、若くして有為な才を抱いて死んだ親友であると言っている。この詩は、文芸と映画の雑誌「オアシス」編集部に依頼されて高が寄稿した追悼の詩である。雑誌「オアシス」は及川道子という女優について編まれた雑誌で、白銀は特別寄稿をしていた。

高は若くして寂しさと貧しさの中で死んだ白銀を悼んでいる。また、高は白銀の詩を「逆境と反逆と疲労で血塗られた血みどろの詩」と評している。さらに、愛人が去ったことに対する共感が詩に詠み込まれている。洗足池畔をジイドを語りながら歩いた記憶が鮮明に蘇る中、高は自分の書斎の窓を開けながら繁生のことを思い出しかつての親友の思い出に浸っている。文学を語り、恋愛を語った友人の死。若き日の東京生活の様子が伝わってくる詩だ。

四、散文「寂光」(一九三三年 昭和八年 昭和医学専

門学校「学友会誌」六号に寄稿)

(内容)

『久遠の自像』の「序に代へて」には「次の三つの散文『寂光』『孤独なる日記』『山の秋』は、二十一才から二十三才まで一篇づつ某誌に書いたもので、何しろあまりに若い日のもので、おかしいが、長い間持つてゐた原稿だけになつかしく、少しおこがましいが、ここに一緒に収録することにした」とある。若書きの散文はどれも恋愛や社会との相克が描かれており、青年の繊細なセンチメントが細部にまでゆきわたっている。

「寂光」の第一段落では、テオドール・スェトルム(シユトルム)の「湖畔(インメンジー)」のラインハルトとエリザベートになぞらえて失われた恋が語られる。

第二段落は春の北海、日本海に面した平和な漁村の海辺が舞台である。両親を失い十五歳で叔父の家に預けられた少年・涓(けん)は大柄な身体であり多感で活発な少年である。しかし、いつもどこか寂しそうにしていた。涓が預けられた海浜の家の少女・従兄妹の町子は朗らか

で幸福そうに笑う少女だ。町子は涓にとって孤独を慰めてくれる唯一の存在であり、「第二の母」であり「たった一つの太陽」であった。少年は亡き母を思い、その面影を町子の中に重ねている。

ウィリアム・ブレイクの詩(「揺りかごの歌」イラスト入り詩集『無垢の歌』所収 一七八九年)がこの散文の中に通底音のように響く。

「ねむれ、ねむれ、幸あるわが児、
ありとあるものは眠りほほむむ。

ねむれ、ねむれ、幸ある限り、
お前をのぞきこんで母が泣く間。」

涓はたった一度でいいから母に抱かれて眠りたいと願っている。しかし、母はもういない。

第三段落には五年の月日が流れた後の町子のことが書かれている。町子は県立女学校を卒業後、附属の師範学校に入学し母校の小学校に奉職していた。父から勧められた結婚をことわり、教職に就いていたのだ。

第四段落には涓の五年後が書かれている。涓は東京の

大学の文科に進み、灰色の詩人となっていた。モーパッサン、チェホフ、ゲーテ、ダンテに親しみ、文学によって孤独を忘れようとした。そして、火のように文学を愛した。しかし、養家の叔父は文学など享樂にすぎないと文学研究を嫌っていた。帰省するたびに涓と叔父は対立し、しだいに涓は帰省する気持ちを失っていく。しかし、町子は涓の文学研究を好ましく思っていた。

第五段落には大学生である涓が帰郷し、教師として働く町子と会話をする場面が描かれている。町子が子ども達を見送り仕事を終えたあと、帰郷した涓が現れる。涓は感激に震える声で、急に町子に会いたくなつたから帰省し、家には寄らず駅からすぐに町子に会いに来た、と言う。町子は、帰省が遅いから心配していた、と涓を慮る。そして、先生という仕事が好きであることを涓に伝える。涓は、大学を辞めて自分も働きたい、と町子に言う。現在の大学はブルジョア学生の冬眠場か享樂場にすぎない。そして、文学は教室では学べない、文学はもつと真剣で自由なものだと言う。今の大学は文学を冒瀆している、とする。それに対して町子は、学生生活は一つの道程であり、そのあとに大きな仕事待っているの

は、と提言する。涓はその町子の言葉に対して、試練場であるはずの大学には厳しさが足りない。プールで水遊びするような生活しかない。もっと荒波にもまされたい、と昂ぶる。町子は涓の向上心に対して「すごいね」と言い、しかし涓が昔に比べて「ニヒリスチック」で「懐疑的」になつたことを悲しむ。

涓は美しい町子との時間を慈しむ。都会にいるときも、幾度となく町子のことを思った。そして、大人になるにつけて、世の中の醜さが嫌になってきた、という。町子はそれに対して「厭世主義者（ヘシミスト）」と言う。涓は自分の不遇な人生に対して自暴自棄になっている。

第六段落には、それからさらに五年後の晩秋のことが描かれている。涓は大学卒業後、故郷から離れ、やるせない魂を新興詩壇に哀傷詩を載せることで癒やしている。やがて世話になつた叔父が死去し涓は帰郷する。

涓はずっと町子のことを思っていた。町子もまた涓のことを思っていた。しかし、町子は三年前、他人に嫁ぎ、子供も生まれていたのであった。二人は互いの思いを伝え合うこともなく、異なつた道を歩くことになつた。涓は傷つき、自らの過去を「青春の墓場」「幸福の墓場」とと

らえる。父母も、第二の母も失った涓は死を思う。

(考 察)

この「寂光」という作品には、若くして母を失った高島高自身が重ね合わせられているだろう。詩集『山脈地帯』の「著者略歴」の欄には「中学二年の春、祖母、母共に相ついで失い、はじめて現実の冷顔に相対す。このことわが人生の方向に多大の影響を及ぼせり」とあり、母を失った悲しみによって詩を書くようになっていく姿が高島高自身と重なる。しかし、そのような略歴を知らなくてもこの作品は十分に読み応えがある。「第二の母」として認識され、恋の相手となる町子が登場するが、二人は結ばれることなく互いに違った人生を送ることになる。ここでは、少年期を終え青年期に入るにしたがって聖化されていく女性像と世俗の醜さが対比されている。日本には昔から「自分のもとを去っていく女性」(母・恋人)がモチーフとなった作品も多い。他の男性と結婚し、自分の手の届かない場所にいく女性像などは古くは『伊勢物語』第四段「月やあらぬ」にも描かれている。また、近代詩において去って行く女性は多数描かれている。中

原中などもまた、去りゆく女性についての詩を書いた。ここでは、涓の中で聖化された町子は結婚という現実的な選択をし、涓からは手の届かない存在となってしまった。一途に町子を思い続ける涓はこのことに絶望する。さらに涓は、母親の愛情を十分に受けることが出来なかったことを人生の損失としてとらえ、現在の憤懣もまた母親の愛情を得られなかったことが原因だとするペシミステイックな現実認識に至る。悲惨な姿が徹底的に描かれると同時に、自己憐憫に迷い込み、次なる行動に出ることができない男の懊惱が純粹な筆致で描かれている。

五、散文「孤独なる日記」(一九三〇年 昭和五年 昭和

医学専門学校「学友会誌」三号に寄稿)

(内 容)

入院している「私Ⅱ冬木」の寂寥と諦念を詩と散文で織りなした文章である。看護婦である「美和子」は「私Ⅱ冬木」の孤独を慰めようとするが、「私Ⅱ冬木」は自分の寂しさと孤独感を「僕自身で慰めたいのです」と言う。難病にかかり明日をも知れぬ命を危ぶみながら「私Ⅱ冬

木」は最後の詩作を行う。その詩には次のような一節がある。

私の心は空虚である。そしてその空虚の中に獣の如く死を呪う。そして亦神の如く死を愛す。

それだけが私の思想である。

それだけが私の最後の詩である。

衰弱して骨ばかりになっていく自分の腕を見つめ、秋の海の寂漠を感じながら思索がなされていく。看護婦「美和子」は「私Ⅱ冬木」を励まそうとするが、磯を散歩することもできないほど「私」の病状が思わしくないことを思い目に涙をためている。孤独に苛まれている「私Ⅱ冬木」だったが、寄り添ってくれる美和子の存在にささやかな幸福感を覚えてもいる。

しかし、詩の最後では、

一切は終わりだ。

一切は砂上の宮殿だった。

人生は煙だった。人間は人間で終わるのだった

という諦念に至る。

(考 察)

まず、登場人物名「冬木」は高のペンネーム「冬木牧人」と同じであることが指摘できる。高島高は、自身の投影としてこの病身の男を描いていると言える。ただし、そのようなエピソードを知らずともこの作品の静謐さは十分に読者に伝わるだろう。人生に対する悲観的な一面が比較的そのまま語られており、北川冬彦が詩集『北方の詩』「序に代えて」で「男性的詩人」と評した高島高の力強さの裏側に潜む繊細さや弱さが垣間見られる。逆に、このような繊弱さを自覚している高島だからこそ、寂しさを捨象した鋭敏な北方世界を描くことができたのではないか。また、詩の中には書くことができなかった（弱さ）というものの表現を、散文という詩とは異なった形式に求めようとしているとも言える。言葉は心身の衰弱と死を観念的にとらえる方向に働いており、読むほどに寂漠が広がるように書かれている。ただし、強烈な空虚さとは裏腹に、献身的に看護をしてくれる「美和子」の

存在が唯一の救いであることはたしかだ。

六、散文「山の秋」(一九三三年 昭和七年 昭和医

学専門学校「学友会誌」四号に寄稿)

(紹介)

秋。樹の葉の雨が降る。魂の雨が降る。

恋に死んだ、魂の雨が降る。

女はかなしげに想を西に馳せ。

木立は虚空に、忘却の姿をかたどる

右のようなグールモンの詩で始まる散文である。都会の喧噪を抜け出して無名の温泉場にたどりついた「私」は、不満と、反逆と、興奮に疲れた蒼白い都会の青年」は、温泉場の人々の純朴な微笑みに心癒やされる。都会には争闘があり、エゴイストがおり、沈鬱で断片的な生活があると云う。それを湯につかりながら癒やす「私」がいる。

さわれ山は自然だ。自然は神に近い

私は少年の様に無邪気になることを希つた。無邪気に遊び、無邪気に笑つた少年の日を私はじつと思ひ浮かべてゐた。

右のような一節から、「私」が心身を休めている様子が見て取れる。しかし、文中に挿入された詩には左記にあるとおり、愛する女性を失つた悲哀が語られている。その内容は先に紹介した「寂光」と重なり合うものである。

長い間孤独と戦つて来た私の心は、

遠い幻の彼方の

愛に飢えてゐる。

愛のない人間程さびしい人間はない。

慰められるべき愛のない、冷たい人生の中を私はと

ぼとぼと二年、三年と歩いて来た。

幻の影を慕ふ純真なる感情がせめてもの濁り切つた

私の生活の中に、赤く咲いた一輪の花であつたが。

久美子はどうとう結婚して仕舞つた。

「久美子」は「私」の幼なじみで「陰鬱な北国の一漁

村に咲いたうるわしい花」であった。「私」は遠い燈明を眺めるように「久美子」の幻を見ながら生きてきていた。そのような「久美子」は見知らぬ人の妻となり、「私」には手の届かない存在となった。「私」は恋心を「笑ひながら巷の赤い日に捨て」、誰を恨むこともできずに「狂人の様に久美子との運命を呪った」。そして、「愛の奪れた人生に、私は捨犬の様な寂莫を感じた」。そして、「久美子」への想いがエゴイステイックなものに変化することを恐れた。心が変化し、愛が憎しみに変わることを恐れた。かつ「私」は「愛し合わねばならぬ男と、女が、時には冷めたい目でにらみ合ひ、そしてそのまま永遠に別れていく例は少くない」と言う。このような失恋の悲哀を抱きながら、山の秋を眺めつつ思索に沈潜する「私」がいる。その思索には「愛し合ひながら永久に別れ行かねばならぬ人達！／憎しみながら永久に離れ得る事の出来ない人達！」という対句的表現のアフォリズムが含まれている。

二、三日たって麓の村から「千代野さん」が訪ねてくる。「千代野さん」はこの村一のインテリで、東京の女学校を出た女性である。東京で結婚して半年ほどで離婚し、

永久に都会と結婚をあきらめた不幸な女性として描かれている。そして「千代野さん」は詩を書き、「私」はその詩を東京の本屋の店頭で並べられた少女雑誌で眺めたと言う。二十五歳で理的、かつ聡明な美しさを持つ「千代野さん」に「私」はほのかな好意を抱く

「千代野さん」は、かつては自分も朗らかな女だったと言う。しかし、今は「(自分は強い女)。わたくしはいつも自分自身に教へていますわ。ともすれば、寂しさや、悲しさや、悩みに負けそうな自分自身の心に。空虚や、寂莫や、不幸を私は征服したいんです。．．．虚勢かしら。」とその内面を「私」にもらす。「私」は哀愁をまとった「千代野さん」の儂い美しさに触れる。と同時に、「千代野さん」が自殺するのではないかと心配にもなる。

「千代野さん」を村まで送ったあと、「私」はひとり夜の山路を、死の涯まで続く道のように感じながら歩く。それは人間にとっての過去と現在の意味が問われる思索の歩行であった。最後に挿入された詩には、

私は争闘を止めやう。

長い間しいたげられて来た、

反逆の心を捨てやう。

私は真直に素直に生きて行かう。

とあり、かつ、

私はもう泣かない。

二年、三年、五年と、私の生活は光の無い生活だった。

誰からも愛された事のない私は、
人一杯人なつくく生きて来た。

と、生きるための道化について書かれている。そして、山を去ることを決意する。山を去る日、停車場に「千代野さん」とその美しい妹「町子さん」が見送りにきこれる。「(都会へ！再び都会へ！)」という心の叫びとともに「私」を乗せた汽車は出発する。

(考 察)

北国の漁村の乙女が登場する点や幼なじみとの恋が実

らず失恋に苦しむ様子が「寂光」に重なる。しかし、「寂光」と異なる部分は、「私」を回復に導いてくれる山間の湯場や「千代野さん」の存在である。「千代野さん」の存在は湯ヶ島での宇野千代の姿と重なるところがあり、夜の保養地を歩きながら思索に沈潜する様子は梶井基次郎「闇の絵巻」(一九三〇年 昭和五年九月 「詩・現実」第二冊に掲載)と類似しているとも言える。「千代野さん」の妹「町子さん」が「寂光」のヒロイン「志村町子」と同じ名前であることも気になる点だ。

いずれにしても、都会と山間地の対比は「山脈地帯」と基本的には同じ構図である。都会は猥雑であり、山間地は人間の純粹さを回復させるという認識は、近代日本にとつての「都会」というものの存在の大きさを示すだろう。「都会」が顕在化することによって見直される「山間部」の存在。高島高における〈北方〉や〈山〉は都会の存在があつてはじめて異彩を放つものだ。そういった意味では、高島高の詩は都市化が進んだ近代だったからこそ生みだされた作品だとも言える。

七、「寂光」「孤独なる日記」「山の秋」についての総合的

考察

この三編の散文はどれも昭和医学専門学校「学友会誌」に寄稿されたものである。最初に「孤独なる日記」（昭和五年）、次いで「山の秋」（昭和七年）、最後に「寂光」（昭和八年）の順で寄稿されており、『久遠の自像』所収の順とは異なっている。

これら三つの若き日の散文を読んでも、この三作品が登場人物こそ一貫しては無いが、内容的には一連のものとして読むことができるということに気がつく。また、高島高は『久遠の自像』を編んでいる時点でこの三編が時系列として関連するような読み方ができるように並べ直したと考えることができる。

「寂光」は男女が互いに成長していく過程をそれぞれの価値観に触れつつ描き、女が就職・結婚という現実的な人生選択をしていくのに対し、男は出自の呪縛を引きずりながら失恋に打ちひしがれるという構図を持つ。

「孤独なる日記」は、「寂光」の間接的な続篇として読むことが許されるならば、衰弱した男が世を離れた病院

という閉鎖空間で不安と諦めで心身を満たし、静的な療養の時間を過ごすという作品だ。

「山の秋」は「寂光」にて描かれた失恋の痛手を回復させる物語と読むことができる。したがって、これら三つの作品は、それぞれ単独で読むこともできるが、同時に「憧れ↓失恋↓絶望↓静養↓回復」という風に連続する物語として読むことができるよう配列されていると言える。このような点からも、この三作が単に私生活を赤裸々に反映したものと違い、あくまでも虚構が真実を照らし出す文学作品として扱われていることが分かる。生活や思索の一断面を照射することが小説の機能であるとするれば、これら三作品はそれぞれに青少年期の思慕、失恋の苦悩、諦念や生への意志の回復を如実にとらえていると言える。また、登場人物が都会と海浜、都会と山との往復運動をする点でも共通している。海浜や山には安らぎがあり、都会には対峙するべき現実がある、という相対的な認識そのものが近代の特質であることは先にも述べた。

さて、高島高自身が『久遠の自像』「序に代へて」で書いているが、この三編は「何しろあまりに若い日のもの

で、おかしいが、長い間持つてゐた原稿だけになつかく、少しおこがましいが、ここに一緒に収録することにした」ように、回想すればおかしくて、なつかしくて、収録することに若干の抵抗が感じられるものであったことが推測できる。ともすれば自己嫌悪や含羞の対象となる若書きの三編である。が、若き日の多感かつ情熱ゆえの懊悩について、回想することが可能な距離感を獲得することができた昭和十六年の時点だったからこそ、発表順通りではなく物語性を加味した配列にして『久遠の自像』の中に組み入れることができたのではないか。まさに、愛しくもありくすぐったくもある、久遠に消すことのできない自らの像である。

群峰 第4号

発行日…2018年3月3日

◇研究論文

木下 晶

林忠正「外山博士の演説を読む」をめぐる日本西洋美術教育の提言

孫 媛媛

芥川龍之介の金沢訪問と室生犀星

水野 真理子

小寺菊子の作品に垣間見る宗教観―「他力信心の女」「念仏の家」より

谷川 拓矢

現代女性作家による富山文学の変遷―木崎さと子から山内マリコへ―

◇講演筆録

上田 正行

千石喜久と言う詩人―「日本海詩人」を視野に入れつゝ

黒崎 真美

魚津文学散歩報告

◇2017年度 活動報告

木崎さと子の文学

—富山・宗教・生命の探求

水野 真理子

一、はじめに

木崎さと子（本名 原田正子）（一九三九—）は、富山の代表的な女性作家である。彼女は一九八〇年発表のデビュー作「裸足」で第五一回『文学界』新人賞を受賞、その四年後「青桐」で芥川賞を、さらに一九八八（昭和六三）年『沈める寺』で芸術選奨新人賞を受賞し、着実に作家としての地位を築いていった。彼女は硬派な文体と写実的な筆致で作品を書き、その小説の多くでは、生と死、信仰など、人間の原点に立ち返るような深い哲学的な問題を扱っている。このように、木崎は十分な実力を備えた作家であるにも関わらず、彼女について取り上げた研究論文は、筆者の知る限りおおよそ五点であり、いくつかの先行研究も「青桐」論に集中している。富山の

文学研究を進めていくためにも、また女性作家の研究を進展させるという意味でも、木崎の作品について、さらなる調査、研究が必要であろう。

木崎の幅広い創作活動のすべてを、まだ詳細に理解し切れてはいないが、特に一九八〇年代の初期の作品群を概観すると、次の二つのテーマが浮かび上がる。それは、富山、宗教、生命である。デビュー作の「裸足」では、ある女性が数年間のフランス生活を終えて東京に戻ってくる。彼女はフランス人の夫を愛していたと同時に、アルコール中毒が原因で崩壊していく夫を、自殺へと促した過去を持っていた。「白い原」、『文学界』昭和五七年一月号）では、四〇代の女性が、かつて家庭教師をしていた教え子の母親から、娘が新興宗教にのめり込み、信者の男性との結婚を考えているため、彼女を説得してほしいと頼まれ、その教え子と再会する。主人公の女性には中絶経験があり、芽生えた命を自ら消した罪をひきずっていた。そして「青桐」では、主要舞台を富山県高岡市に据え、乳癌を患いながらも、病院での治療を拒否し、病と死を受け入れようとする叔母を、顔に火傷跡があることで人との交流を避け、引きこもるように暮らしてき

た独身女性が、遠巻きに叔母を見守りながら看病する。女性はその過程で、人はどのように死を迎えるべきなのかという問題を目の当たりにしていく。さらに『沈める寺』においては、富山県の氷見市をモデルとしていると考えられる街、氷江の由緒ある寺を舞台に、そこで坊守（住職の妻）を務める中年女性の祐子が、寺の後継を拒んでいる息子の将来を案じる中で、命、愛、罪、信仰心とは何かを考えていく。これらの作品においては、富山、宗教、生命というテーマが、登場人物たちの丁寧な心情描写、生活の描写とともに、重厚感をもって描かれている。

本稿では、今後のさらなる研究を見据えた第一歩として、まず、木崎がどのような経験を経て作家になったのかをまとめ、そして彼女の文学の中核を成していると考えられる三つのテーマ、富山、宗教、生命に焦点を当てながら、それらの問題について、彼女がどのように作品に描いたのかについて考察してみたい。

二、木崎さと子の経歴―作家になるまで二

二―一、異文化体験と生活感

木崎は、一九三九（昭和一四）年一月六日、旧満州国新京（現・長春）に生まれた。父横山辰雄は応用科学を専攻する研究者で、新京工業大学の教授や満州帝国立の大陸科学院に研究員として勤務していた。母は、木崎が四歳の時、満州で病死している。母の死後、彼女は継母に育てられた。

終戦後、満州から引き揚げ、静岡県沼津市を経て、父の赴任先の富山大学工学部がある富山県高岡市に、小学五年の時に引っ越す。富山大学工学部が高岡市にあったことから、高岡で少女時代を過ごした。高岡高等学校を卒業後、東京女子大学短期大学部英文科に入学し、一九六〇年、卒業する。その後、繊維会社の帝人に就職した。

一九六二年、二三歳で、植物発生理学者の原田宏と結婚し渡仏する。この結婚が彼女の人生に新たな頁を加えたと言える。夫の転勤のため、その後一四年間、様々な海外生活を経験することとなった。一九六三年、二四

歳の時にはカリフォルニア州パサデナに渡り、そして翌年、フランスに戻る。一九六四年に長女を、一九六七年に次女を出産している。

一九七四（昭和四九）年、三五歳の時、夫が筑波大学に就職したことにより帰国し、東京の南青山に居住した。日本での生活も束の間、一九七六（昭和五一）年には再び渡仏する。一九七九（昭和五四）年に帰国し、この年から創作を本格的に開始した。そして、木崎の作品は、すぐに日本の文壇において注目され始めた。前述したように「裸足」「青桐」「沈める寺」が各賞を受賞し、実力が認められていく。

これらの経歴からわかるように、四〇代で作家デビューを果たした木崎は、どちらかと言えば遅咲きの作家と捉えることができよう。そして、彼女の作品は、結婚後の暮らしや様々な体験から生まれ、生み出された生活に根差した作品であると言える。その暮らしには、アメリカやフランスでの滞在経験が大きく影響しているようで、須波敏子は『青桐』論の中で、「異文化を漂う主婦作家」と称している^三。須波は木崎を、日本の高度経済成長が波に乗った一九六〇年代以降に続々と出現してくる、

異文化体験を経た女性作家たちと比較して論じている。

例えばそうした作家として、大庭みな子、山本道子、米谷文子、塩野七生を挙げるが、彼女らとは特に異なる特徴として、「戦後の日本が追随した超資本主義大国アメリカ文化の影響ではなく、人間の中の自然と文化の調和を伝統的に重んじるカトリックの農業国、フランスの文化を深く吸収して来た」点を第一に指摘している^四。そして、旧満州での深刻な戦争体験も、木崎の異文化体験として重要だと言及している。須波が述べるように、木崎の文学の発展において、満州とフランスは重要な要素となっているだろう。満州は木崎の出発点であり、そしてフランスの文化と文学が、その満州での幼児期の、特に宗教的体験を肉づける形となったと考えられる。

二二、文学的背景

次に木崎が作家を目指すに至る、文学的な背景を探ってみよう。彼女は幼い頃から「おはなし」を創るのが好きな少女であった。そのことについて、次のように回想している。

こどもの頃、人が考えごとをするとは「おはなし」を創ることだ、と信じ込んでいた。小さな頭が、自分で考え出した「おはなし」の切れ端で一杯で、いつもそれをいじり廻していたので、誰でもがそうしている訳ではないと知った時には、本当にびっくりしたものだ。「おはなし」以外に一体何を考えるのか、と心底ふしぎだった^五。

さらに、一〇代の時、神の存在の有無など形而上的な問題も考えごとの種になるのだと知り、二〇代に入る頃に、この二つの考えごとや妄想が、小説というかたちのなかで、一つに溶けるのだと気づいたとも述べている^六。このように、彼女は物語を創ること、考えることを幼少期から常に行ってきた。そこには母が病床につき、一人遊びばかりしていたという家庭環境も影響しているようだ。

木崎の読書体験についてはどうだろうか。彼女は王道的な読書体験を経て成長している。本を乱読して育ったが、そこにはかなり父の影響があったようだ。父は木崎

が本を読んでいると必ず部屋に入ってきて、何を讀んでいるか聞いたという。父は文学好きで俳句も作ったため、俳句の味わい方などを父から教わった。また夏目漱石や森鷗外の作品しか読ませてもらえなかったといい、小学校上級で漱石の作品を読み始め、中学三年で『こころ』を讀んで、感激したという。漱石から文学についての本質的な影響を受けたと木崎は回想している。また源氏物語も好み、授業で必死に讀んだり、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』を夢中で讀んだ。その他、ドストエフスキ、サキ、ジュリアン・グリーン、エミリー・ブロンテ、樋口一葉も彼女の好きな書物であった。ブロンテと一葉を特に愛讀したようである。また、二度目にフランスへ行った時には、三島由紀夫の全集も持参していった。加えて父から薦められた本には、寺田寅彦の随筆や中谷宇吉郎の書物などもあり、科学的な方面に関しても関心があった^七。

彼女はまた文学作品だけでなく、絵画などの芸術作品からも影響を受けているようだ。例えば、アール・ヌーボー、ギユスターヴ・モロー、フランスの世紀末的工芸

品に関心を持っていたという。その意味で三島由紀夫の作品も好んだ。加えて、絵画への興味は小説内の描写や文章に影響を与えていると自分でも感じ、「まず目で見るように描きたい」と言い、カメラマンにも憧れていたと述べている^八。こうした体験が、彼女の作品のリアリズム的な描写につながっていると考えられる。さらにはフランスに滞在し、フランスの文学や文化に接したことも、彼女の作品世界を作り上げることに貢献したと思われる。彼女は、日本の近代文学、俳句、フランス文化、文学、絵画などから幅広い影響を得て、作品を生み出していたのだ。

二一三、生と死に対峙して

木崎は自らの幼年期を振り返った時に、母の死と満州帝国の崩壊という一大事件が、自身の死生観に大きな影響を与えたと述べている。満州に生まれて満州に育ったことが、木崎自身の人生のあり方や道を決定づけたと認識しており、「ほとんどそこにあるんじゃないかしら。すべてのスタート点も、終着点も。」^九と述べている。満州

帝国が虚構の存在だったこと、母が亡くなったことにより、自分が属していたものすべてが崩れ去ったという体験が、木崎の人生のスタート地点にあった^{一〇}。満州国崩壊により、すべてはいつか滅び去るものと実感し、そして母との別れから、初めに死が存在しているという感覚を得、小さい時から死を考えない日はなかったという。スタートのところは虚無や闇があり、「そこにポツと、たまたま生命ある状態で浮いているというような感じがずっとあったんです。」^{一一}と木崎は述べているが、この言葉が彼女の死についての経験の重大さを物語っている。

二一四、宗教との出会い

そうした死と生命の問題が、「向こうから照らされる」という感覚を、同じく幼児期に得たと木崎は説明している。それは無限というものからの「まなざし」を感じる経験で、人格化されたものとの出会いだったという^{一二}。その人格化されたものとは、イエス・キリストであった。幼少期の体験を木崎は次のように振り返っている。二歳か三歳頃のことであった。四歳半上の姉は、小学校に通

つていたため、自宅で孤独に時間を過ごしていた彼女は、日がな一日、窓から外を眺め、一人遊びをし、地平線や空を見上げていた。また、庭の樹木、ひまわり、森を見て、さらには、野原をさまよう黒い野良豚をのろまな自分と重ね合わせていた。そのような毎日の中で、父が姉と自分に童話を読み聞かせてくれたが、まだ幼いために「かちかち山」ですら、よく理解できなかったという。しかし、ある本を父が読んでくれた時、父の声が彼女の心に流れ込んできた。「あのひとは、茨の冠を被せられて、血の汗を流しながら、じっと優しい眼で、私をみつめました」^{一三}と父は言った。この一節から、木崎は幼いながら、啓示的な体験をしたのだった。

この文章は、白い鳩の目線から語られている。たいそうな苦痛に耐えて歩くその人に追隨して、白い鳩が飛んできて、その鳩をその人は茨の冠の下から血の汗を流しながら、「じっと優しい眼で」見つめたという情景が、幼い木崎の脳裏に浮かんだ。その人は自分を見ていた。その私を見つめる優しい眼を、ありありと見たという。こうした体験を木崎は得ている。さらに、この記憶を約四〇年後、キリスト教の洗礼を受けた時に思い出した。そ

の時、記憶の底からキリストの眼が蘇ってきたという^{一四}。このように、キリスト教との出会いを幼少期に経験した木崎は、帰国後もキリスト教と関連するものに浸って育った。東京の小学校に通っていた頃には、姉が東洋英和女学院に通っており、聖書の言葉を書いたカードなどを持って帰ってきた。また、富山時代においては、バプティスト派のカナダ人宣教師が高岡に居住しており、彼女は少女時代、その宅へずっと出入りしていたという^{一五}。そして、フランスに滞在している間に、キリスト教の中でも、特にカトリックへの信仰がより確実なものになったようだ。生物的には生きているが、常に死がずっと存在したという感覚を持っており、それを転換していたのだという感じがあったという。カトリックでは向こうから与えられる、自分の力ではなく一方的に与えられるという感覚があり、それを「秘蹟」だと木崎は言い、これがプロテスタントとの違いだと説明する。カトリックは「上から一方的に与えられるもので、人間は本当にただただ受けるだけ」とし、プロテスタントは「人間の側の考え方によるところが強い」とその差異を説明している^{一六}。

こうしたカトリックとの接点が、文学的な影響へとつながった作品が、デビュー作の「裸足」であった。主人公の女性せい子は、伯父の長男でいとこの邦明に、都合の良い女としての性的に利用されていた。そうした関係も、邦明の結婚時に手切れ金を渡されて終焉する。娼婦のような惨めさを味わった彼女は、その金銭を準備金として、邦明の友人から紹介された丸一商事のパリ事務所の事務職員となる。そのパリで一人のフランス人男性アンリと出会うのである。内縁の夫となったアンリは、先天性白皮症を患っており、癩癩持ちで、アルコール中毒、顔全体が真っ赤で、白い口髭をたくわえている。無口だが、柔らかな心を持ち、企みなどない人間である。死を予感させるような人物で、死ぬ人では表せないようなやさしさを持っていた。

アンリの「みじめな、透明なやさしさ」でせい子は癒されていく。しかし、アルコール中毒が原因で、アンリは次第に死人のようになっていく。「死になさい。ママンのために、ジャクリーヌのために、わたしのために、死になさい」セとせい子はアンリにささやきかける。壊れているから善良な人間だったアンリだったが、壊れ過ぎ

て怪物のようになってしまった。やさしく綺麗に輝く彼の生が台無しにならないようにと、せい子は彼に自死を促したのである。そしてアンリは線路に飛び込み、電車に轢かれて亡くなる。

この短編のせい子とアンリは、イエスとマグダラのマリアを想像させる^{一八}。マグダラのマリアとは、新約聖書中の人物で聖女と言われる人である。イエスに七つの悪霊を追い出してもらい、イエスの十字架上の死を見届け、最初にイエスの復活の証人となって使徒たちへの報告の役目を与えられた人物である^{一九}。木崎自身、キリスト教を意識してこの作品を書いており、また同時に、作家フランソワ・モーリアックの影響も受けていることに言及している^{二〇}。しかし、日本では、この作品に対して、キリスト教が基盤となっているという批評は出なかった。

そのため、彼女は日本とフランスの文化的、文学的背景の違いを認識し、その後作風の改変をしていくことを考えたという。例えばスパゲッティを茹でて失敗したという生活描写や現実描写に力を入れるほうが良いと気づいたとも述べている^{二一}。こうして「裸足」以降の作品で、作風の模索をしながら、彼女は生死や宗教的問題を描い

ていくことになる。

三、「裸足」以降の作品に登場する富山

「裸足」以降、木崎は富山を舞台とした作品や、富山性をかなり明確に反映させた作品を発表していく。それらの作品について紹介しておこう。

まず「離郷」(『文學界』一九八一年七月号)であるが、ここでは、富山の黒部と考えられる田舎出身の仲江が、富山の本家を二十年前に家出した、父のいとこ春美の東京の住まいを訪ねる。仲江は夫の浮気が原因で、息子の道男を実家の母に預けて、衝動的に家を出てきた。春美は牡丹王と呼ばれた日系アメリカ人の老人の屋敷に同居していた。そこに春美の知人の藍子が訪れる。春美、藍子、老人との数日の付き合いの中で、仲江は生死、結婚、妊娠出産について思いをめぐらす。富山弁が会話に反映され、鳥賊の黒づくりや鱒ずしなどの富山の土産品、また富山はかつて結核での死者が多かったなどの富山に関する話題が挿入されている。そして、富山という故郷は、地に根を張ることができる場所として描かれている。

「夏草」(『文學界』一九八一年十二月号)においては、ある夏の頃、四〇代の三江が三〇歳を過ぎた同僚の逸子と北陸の鷹見市に帰る。この鷹見市は作品内の記述から、高岡市をモデルにしていると考えられる。三江は高校生までそこに住んでおり、逸子は実家が鷹見市にある。逸子の家に招かれ、お盆で帰省し集まった、逸子の兄弟姉妹ら親戚たちと夕飯をとにもする。鷹見市の商店街の様子、仏教、金屋町の情景が詳しく描写されている。また逸子の長姉の夫による戦争体験の話や、妻子ある男性との恋愛という三江の過去、彼女の高校生時代が回想され、また家族たちが集まる田舎の盆の風景が、臨場感をもって描かれる。

「楼門」(『海燕』一九八三年八月号)では、四〇歳の真子と四二歳の悟が富山の瑞龍寺で、二〇年ぶりに再会する場面から始まる。真子の父は文部省の事務官、悟の父は教官で、高岡の新制大学の工学部に勤務していた。二人はともに職員宿舎で育った幼馴染であった。互いを恋愛対象として意識してもいたが、悟の足に障害があったため、真子は恋愛に発展することを避け、結果的に悟を傷つけた過去があった。真子は東京の短大を卒業しす

ぐに結婚したが、離婚してしまう。そして帰郷した折に、悟に謝りたい気持ちで彼に連絡し、再会した。城址公園、前田利長など高岡の土地についての描写が作品を彩っている。真子が子供時代を懐かしみ、罪を償いたい思いで回帰する場所として高岡が描かれている。

これらの作品には、特に富山の風物、土地柄、名所などが挿入され、そして、木崎の少女時代の境遇、家庭環境や経験が織り交ぜられている。また「旅の人」と地元住民との相違や、浄土真宗への篤い信仰心が描かれる。加えて重要なのは、富山という場所が、回帰する場所として設定され、そこに生と死の問題を絡める形で物語が展開されていることである。

四、『青桐』にみる富山・宗教・生命

四―一、あらすじ^{三三}

それでは次に、芥川賞を受賞した「青桐」を取り上げ、そこに表れる富山、宗教、生命の問題について詳しく見てみよう。まず話の筋は以下である。時代設定はおそら

く一九八〇年代で、舞台は北陸のT市と記載されているが、富山県の高岡市をモデルとしているよう。兄夫婦のもとで家事手伝いをしてひっそり生活する三四歳の充江。

そのような暗澹とした毎日を送る彼女の生活に変化が訪れる。乳癌に蝕まれ死期が近いと自覚した叔母が、かつて居住していた高岡の家に東京から戻り、自宅療養することになった。叔母は、結核により両親を亡くした充江と彼女の兄を、母親代わりとして育ててくれた人である。叔母は病院にも行かずあらゆる治療を拒否している。叔母の家のすぐそばに住んでいる充江は、叔母の息子である従兄の史郎から、治療を拒否する叔母の意思を尊重し、そつと見守りつつ、主に食事などの世話だけをしてくれないかと依頼された。史郎に対して淡い恋心を抱いていた充江は、胸の高鳴りを押さえつつ、史郎の依頼を受諾し、叔母を見守っていく。そうした生活の中で、死について、そして自分の過去と現在について見つめていく。

この作品において、生と死、信仰の問題を考える場として、木崎は富山という場所を選んでいる。そしてこの物語は、彼女の中学一年生からの親友の話に着想を得ているという。その親友は、高岡郊外の地主の娘であり、

母一人子一人で育った。音楽の先生だった彼女の母は、「青桐」で描いたような亡くなり方をしたという^{二三}。

四―二、『青桐』に描かれる富山の形

続いて作品に描かれる富山性を見てみよう。叔母の家「曾木」は戦前、大地主として栄えた家柄であった。叔母自身は金沢出身で、嫁いだ夫（充江の叔父）の妹が充江の母である。この「曾木」という本家の衰退が、物語の根底にある。そして拡大家族という方から核家族へと向かっていく社会変化や、一九六〇年代の高度経済成長期における、富山の田舎から東京をはじめとする都会へと人々が移動していく社会情勢が映し出されている。実際、この「青桐」が発表された時、この作品については、例えば作家の安岡章太郎は「単なる癌小説ではなく地主階級の没落を描いた小説」^{二四}だと評し、また富山出身の文学者佐伯彰一は「手がたいリアリズム、家族小説の形、都会対田舎という副テーマがある」^{二五}と論じている。

大地主であった「曾木」の家屋敷の様子も、富山に見

られた、そして現在でもその名残を見せている農家の様子を象徴している。通りに面して屋根をのせた門があり土塀で囲まれている。門のそばの両側に二つの納屋があることから、その門は納屋門と呼ばれている。納屋門をくぐると木の内塀があり、広い庭を縦に仕切っている。三つの土蔵もあった。母屋の玄関は広い式台を備えており、脇に広がる土間、襖を取り払えば大広間になる田の字型に並んだ座敷、黒漆と黄金の仏壇、その背後に壁を隔てて並ぶ小部屋、味噌瓶が据えてある味噌部屋などが備えられていた^{二六}。

従兄の史郎の家庭状況には、田舎から都会への人口移動の情勢が映し出されている。史郎は東京の大学へ行き、卒業後は東京で就職し、また妹（充江の従姉）の晴子も東京の大学に進学した。その結果、叔母は意を決して、母屋を解体することにし、母屋の一部は寺に移築して離れの小さな住居だけを残した。この小説の時代設定は一九八〇年代と推測されるが、そうすると史郎が大学を卒業した二二歳頃とは、およそ一九六〇年代頃と想定され、まさに高度経済成長期で若者たちが田舎から都会へと流出していった時期と重なっている。一方、充江よりおよ

そ五歳上の兄浩平は、地元の農業高校を卒業して農協に勤め、結婚を機に充江とともに独立し、曾木の家の近所に住居を構えた。兄は地元に残った若者として描かれている。

娘の晴子が上京した後一〇年ほど、おおよそ一九七〇年代初め頃まで、叔母は離れで一人暮らしをしていた。その住居は母屋の解体時に改築されたものである。部屋が三つあり、長い渡り廊下の先に茶室と水屋を改造した台所、そして風呂場がある。三つの部屋のうち、南に縁側がついた十畳と八畳の座敷は「新部屋」と呼ばれ、北から西に濡れ縁が廻っている六畳は「化粧部屋」と呼ばれてきた。その後叔母は、東京に住む史郎の家と娘晴子の家を行き来して暮らし、富山の家には年に一、二度しか帰らなくなっていた^{二七}。濡れ縁のすぐ先に梧桐の木が、叔母の帰りを待つように若葉を広げている。

こうした曾木の本家に対する村人の態度も、戦後の地主の衰退という社会変化を表現している。例えば、小作人であった源爺は、田畑を切り売りして金銭を得ていき、金銭崇拜を持った人物として描かれている。冠婚葬祭の折には本家からの寸志があてにされ、叔母はその度ごと

に、気前よく金銭を差し出してきた。しかし、村人はその一方で、先祖伝来の道具、庭石、はてには家屋敷まで売った本家の女主人（叔母）を批判している^{二八}。

また小説内には、都会と田舎の対比が描かれ、都会に対しては否定的な見方がなされている。従兄の史郎は、村人からは本家の長男という意味の「御兄さん（ごあんさん）」と呼ばれるにすぎず、本家の後継ぎとしての「旦那さん」という名では呼ばれないため、都会に出た彼は村人たちによっては認められていない存在として描かれている。史郎の妻梨香は、神経質な性格で、子供たちに小学校受験をさせ、田舎の富山の人間とは距離のある都会の人間として、象徴的に描かれている。

四―三、主要テーマ―生と死

死を自宅でどのように迎えるのかがこの小説内での重要なテーマではあるが、現代でいうところの在宅医療とは、異なっているよう。在宅医療は、患者が病院での入院、治療ではなく、自宅においての治療を選択し、医師、訪問看護師、また訪問リハビリ、訪問介護の専門家が連携

して医療行為を行っていくものである^{二九}。それに対して、「青桐」においては、叔母は一切の医学的治療を拒否し、病をそのまま受け入れ、死への道をゆっくり歩んでいく。叔母が死と向き合う姿を見てみよう。充江は叔母に、医者にかかりたくないというのは本当なのかとためらいながら尋ねる。それに対して叔母は次のように言う。

本当やわ、むろん。周囲の人に気を兼ねさせて、史郎には気の毒なことや、とは思うけれども……。お医者にかからんで、自分で病いをいたわる自由いうものも、ひとにはある、と思わん？（六三）

この言葉に対して充江は、「病いをいたわる、というのが、単に自らを看病するというより、病気を慈しんで受け容れるというように聞えた。」（同上）と感じている。さらに叔母は「……躰ごとのことやもの。まるまる、そのひとの生命いのちのことやもの……」（同上）と答える。それに対して充江は、真実を得たように感じる。

あ、と眼がひらくような思いがあった。今朝方、史

郎から聞いた時には、ひたすら死に向かって進む、悲壮な陶酔感を思い描いて、分る、と胸の内では死た。しかし、叔母は病を含んだ生をも、あるいは死そのものをさえ含んだ「まるまるその人の生命」をそつと愛しんでいるだけなのかも知れない……。六三―六四）

前述したようにこの小説には叔母のモデルとなる人物が存在したようであるが、現実にはかなり稀有だと思われる、こうした叔母の病との向きあい方を描くことで、木崎は何を提示しようとしているのか。この叔母の生き方は、死と一体化し、朽ち果てていく肉体を受け入れるという姿勢であり、そうした選択をする自由も人間にはあるという主張である。

こうした叔母の考えを、充江は半ば理解できるようでいて、すべてを会得できないでいる。一人で病を養うのも、自分一人のための暮らしを人が生きているからではないかと充江は主張するのだが、それに対して叔母は、「……そうやるか。自分ひとりのため、ともよう言いきらん。そやけど、誰のため、いうて……」（六五）と庭の

梧桐の木を見上げ、「きつと、会ったこともない、誰かのため、か知れんわねえ」(同上)と答える。この会ったこともない誰か、というのがいったい誰なのかが、この作品を理解する一つの鍵でもあると考えられる。しかし、誰なのかは直接的には描かれない。

叔母との関わりの中で、死を見つめると同時に、充江は生についても考え始める。彼女の人生によってあぶりだされる生について見てみよう。顔の火傷の跡を隠すため、引きこもり、半ば死んでいるかのような生き方をしてきた充江であった。しかし、叔母の生き方、死の受け入れ方に接して自分の生も見つめ直し、また叔母に自分が必要とされていることで、自分の生をしだいに取り戻していく。

しかし、生を取り戻しつつあった充江の心を、再び元の暗い世界に引き戻すような出来事が起きる。それは彼女の顔の火傷跡に関することであった。火傷の跡は、彼女の中に深く刻まれた心の傷でもあった。整形を勧められても拒否してきた火傷の跡は、彼女のアイデンティティにもなっている。その火傷の原因について、充江は衝撃的な内容を兄から聞かされる。まだ幼かった頃、従姉

の晴子と充江が台所で料理をする叔母にまわりついていた時、叔母が天ぷら鍋をひっくり返してしまった。その時、天ぷら鍋に近い場所にいた充江ではなく、思わず晴子だけを突き飛ばしたという。そのせいで充江は熱い油をかぶり顔に火傷を負った。これは兄の記憶であった。この内容に、充江は当然ながら甚だしい衝撃を受ける。自分に整形手術を勧めてきた叔母は、火傷を負わせたという彼女自身の罪を償うために、そうしてきたのかと充江は思う。叔母の看病をしながら生を取り戻しつつあった充江は、また心を閉ざし悶々と暮らす闇のような日々に戻っていった。三〇。

その後、晴子が海外から駆けつけ、また史郎の妻梨香も富山に来て、叔母の看病に加わる。それから間もなく、叔母は息を引き取った。自身の火傷の原因を作ったのが叔母であったと知った充江は、複雑な思いで魂が抜けてうつろになつていく叔母の死に顔を眺めていた。

葬儀も済んだ後、晴子と梧桐の木を挟んで話す機会があり、充江はずっと心に重くのしかかっていた火傷の原因について、晴子の記憶を思い切って聞いてみる。すると、天ぷら鍋をひっくり返したのは叔母ではなく、手伝

いに来ていたおたけ婆さんで、叔母は咄嗟に右手でガスの火を止め、左手で晴子を突き飛ばしたというのだ。しかし、天ぷら鍋に近い方にいた充江ではなく、娘の晴子の方をとっさに突き飛ばしたのは事実で、それを叔母は悔いていたと晴子は告げる。

この言葉を聞いた充江は、自分にとっての叔母の存在の意味、彼女の生き方や死の意味を再び考え始めるのである。数日前に見た不可思議な夢が、充江の頭に浮かぶ。その夢は、幼少期の記憶が混在したものであった。梧桐の周りをこども達が手をつなぎ、かごめ、かごめを歌っている。その中に、史郎、晴子、浩平、和美、充江もいた。「後ろの正面だあれ」の言葉とともに子供たちは散らばる。目を隠して梧桐の後ろでしゃがんでいる子は、叔母か充江のようだった。冷えた夕暮れは水底のようで青い樹が硝子のように蒼ざめている。そこに巨大な魚が泳いできて、叔母か充江かどちらか不明な屍体の傍らを過ぎてゆく。充江が、そばに晴子がいると思った瞬間、水底の林のような藻の間を縫って史郎が泳いでくる。その口には光る珠がくわえられていた。その珠を充江は欲しいと思ひ、唇を動かし喘いだところで目が醒めた。この

ような不可思議な夢であった^{三二}。

充江は夢のなかの光る珠をふと思ひ出す。水底の屍体は、やはり充江自身であり、叔母は、崩れた乳房の奥からとり出した青く光る珠を、充江に遺してくれようとしたのではなかったのか。(二三九)

先の不可思議な夢やこの比喻をどう解釈するのかは難しいが、この物語における充江の心の変化と叔母の役割を鑑みると、青く光る珠は、生命を象徴しているように思われる。暗く単調な生活を送っていた充江のもとに史郎が現れ、叔母の世話をする中で、充江は生を取り戻しつつあった。しかし、火傷の跡の原因が心に重くのしかかり、再び死の底であえぎ苦しんでいた。史郎が持っていた光る珠を充江は、手にすることができずもがいていた。そのような充江に、叔母が崩れた乳房からとり出した青く光る珠を遺そうとしたということは、叔母の死が充江に生への再出発を促したという意味として、捉えることができないだろうか。そして最後に充江は、火傷跡を治すための整形を受けてみようと思ひ始める。この心

の変化は、彼女の人生、生への再出発を明らかに示している。

―しゅじゅつ、するがやったら、きつと、会うたこともない、だれかのためか知れん。透きとおつた幼女の声が、充江の耳を搏ち、梧桐の幹をのぼつてから、空に消えた。(一四一)

この一文で物語は静かに終わる。この「会うたこともない、だれか」とはいったい誰のことを指しているのだろうか。ここではやはり、木崎の幼少期の体験を思い起こす必要があるだろう。「死」から出発している充江が、火傷の跡を治すことで「生」を得る。死と隣合わせだった幼少期の木崎が、キリストという存在に出会い、救われたという原体験の反映だとすれば、この誰か、というのはキリストのことを指していると考えられることもできるだろう。そしてこの表題「青桐」が何を意味しているのかも重要な点である。この青桐や梧桐の意味するところについてはまた別稿にゆずりたいが、時々描かれる青桐、梧桐の木は、まずは本家の象徴でもあり、充江の幼い頃

の思い出も表しているという印象がある。また叔母の生き方の象徴にもなっているだろう。

「青桐」は、一九八〇年代頃の富山の元地主、農家の様子、そして都会と田舎の対比や、心に傷を抱えた充江の心理と心の変化を細やかに描いた写実的な作品である一方で、木崎のキリスト教的宗教観や生命観が物語の根底に流れている深い作品である。

五、『沈める寺』―富山と信仰の問題

「青桐」では乳癌という病を経た死への向き合い方、そして充江の人生の再出発が描かれていた。その根底には木崎のキリスト教にもとづく宗教観も感じられる。「青桐」以後、宗教的問題に関して、真正面から取り組んだのは『沈める寺』である。最後にこの作品について言及しておくことで、富山と宗教というテーマをなぜ木崎が選んだのかについて考える手がかりを提示してみたい。

『沈める寺』は、次のようなあらすじである。氷見市をモデルとしている氷江という町に、聖永寺という由緒ある寺がある。その聖永寺の坊守を務める祐子は、一人

息子の晴光の将来や寺の後継に関して心を悩ませていた。というのも、晴光は一年前の春に京都の宗門の大学を卒業し、その後上京したままで氷江にはなかなか帰ってこなかったからである。ところが、晴光は梅雨の頃にふらりと戻ってくる。再び上京するつもりでいることは目に見えていたが、この間に氷江に留まるように晴光を説得しなければいけないと祐子は感じていた。晴光は絵画や音楽に夢中で、一日中絵を描いたり、ギターを奏でたりして毎日を過ごし、寺の後継を拒んでいる様子であった。そのような折、聖永寺の下寺の一つであり、本坊の境内にある寂明寺の次男で中学一年の昭二が、義父と母のもとを離れて東京から戻り、再び実の父とともに生活することになる。昭二の母は、障害を持っていた長男（昭二の兄）を置いて、氷江で漁師をしていた男性と駆け落ちしたのだった。家を出る時に昭二が泣いたからやむなく連れて行ったというような母親であり、昭二に対して深い愛情を示してこなかった。こうした状況下で、住職、妻である祐子、寺に出入りする門徒総代の孫である女子高生朱美、氷江の町でスナックを経営し占い師でもある怪し気な美女の智香尼、そして祐子の小学生時代の同級

生でもあり、晴光の高校の担任でもあった藤木、彼らの関わり合いが繰り広げられていく。その中で、氷江の歴史や自然、浄土真宗や山岳信仰、家族のあり方や母の愛情、また寺の経営や維持、後継者の問題、罪や赦しについてなど、多くのテーマが描かれていく。

これらの中で主要な問題は、やはり信仰に関してだろう。ただ、クリスチャンである木崎が、キリスト教ではなく、浄土真宗を通して宗教心という問題にアプローチしたのはなぜだろうか。その一つの理由は、やはり富山に根強くある浄土真宗への篤い信仰心にあるだろう。親鸞上人が開祖した浄土真宗は、室町時代後期の一四七一年六月、蓮如上人が、加賀・越前国境の吉崎（福井県金ヶ崎）にて布教活動を行ったことから北陸に広まったとされ^三、富山も福井、石川とともに真宗王国と呼ばれている。したがって、富山を舞台に宗教的問題を描く時には、浄土真宗を描いてみたいと思わせるのは自然なことではある。

明治生まれの富山の女性作家小寺菊子（一八八四—一九五六）も、富山における浄土真宗の問題を、小説の中でたびたび取り上げてきた。小寺は「哀しき祖母」（一九

二二) (のち「他力信心の女」(一九三七—一九三八)と改題して発表)において、悲しい末路を辿る老女を描く。熱心な浄土真宗の信仰者である祖母は、信仰心の薄い夫や長男夫婦から理解を得られないことに不満を抱く毎日を送っていた。それに加えて、さまざまな悲劇が家庭を襲い、夫は死去し、息子は行方知れずとなり、息子の妻と孫たちも家を出る。一家は離散し、祖母が多額の献金をしてきた寺からも見捨てられ、彼女は一人悲しい死を遂げる。そのような悲痛な祖母の姿が作品の中心として描かれている。

また「念佛の家」(一九三四)は、小寺が富山に帰郷した際の自身の経験が語られる自伝風の小説である。父方の本家に久方ぶりに訪れた際に、本家の長男が結核を患っていること、それ以前から家族の何人もが結核で命を落としてきたこと、それにも関わらず、近代的医療による治療を求めたこともなく、ひたすら念仏を唱えているだけの諦め主義、頑迷な念仏主義に頼っていることに対して、批判的な思いを小寺は作品内で描いている。木崎と小寺の浄土真宗の扱い方に相違はあるが、富山という舞台においては、浄土真宗をめぐる宗教問題は、重要な

要素の一つとして認識されうるものである。

そうした富山の風土や特性という側面以外に、なぜ木崎が、富山を舞台に、生死、信仰をテーマとする作品群を描いたのか、木崎自身の言葉から探ってみよう。木崎は高岡についての印象を「死を凝視しつつ」や『夢の記憶』において述べている。満州での生活に比して、戦災に遭わなかった高岡は、非常に落ち着いた城下町というものであった。金沢の城下町とは違い、商業、手工業が盛んで実生活を大切にす、地に足がついた生活をする町だという印象があったようだ。真宗王国と言われ、信心が染みつき、どこか家庭にも立派な仏壇がある。その特徴は、自分の有していないものとして快かったとし、日本の中の一番良い部分を高岡で見た気がする」と述べている^{三三}。

その一方で、少女時代においては、自身は「旅の人」「異邦人」「梓の外」の人だったと感じていたという。その後、本当の異邦人として長く外国で暮らし、帰国して、高岡との縁が戻った時に、友達がいるというなつかしさや北陸の戦災に遭わなかった街の古さと、自分の日本語表現とが適合し、小説の舞台として得難い場所となった

と述べている三四。

こうした木崎の富山への思いや、彼女の人生を踏まえて見てみると、彼女が富山をどのように位置づけたのかは次のように捉えることができよう。まずは彼女には虚構、そして死としての満州があった。その後、高岡で少女時代を過ごしたことで富山の風土や慣習を肌身を感じる。さらに東京女子大学短期大学部で学び、結婚を期にフランスやアメリカで暮らす過程で、カトリックへの確信も強くなっていった。また、フランスやアメリカで過ごした時間においては、自身を異邦人として捉えていた。そして、再び、少女時代を過ごした富山に戻ってきた時に、生の実感と異邦人ではない自身の居場所を、富山において獲得できたという感覚を得たのである。そうして、回帰しうる場所として、高岡を中心とする富山が位置づけられたのだろう。富山という第二の故郷、富山にある土地に根差す生活、篤い信仰心、これらが木崎のカトリックにもとづく生命観、宗教心と結びついて、創作の意欲を掻き立てていったのではないだろうか。

六、おわりに―戦争体験をどう描くか

以上見てきたように、木崎のデビュー当時から、作家として成熟していくまでの経緯を確認し、それらの経験や彼女の富山に対する見方、彼女の生命観、宗教観が、作品の随所に反映されている点を明らかにした。富山、宗教、生命の探究という主要テーマについての要点はつかむことができたと思うが、彼女の作品はその舞台設定や描写されているモチーフの暗示するものが重層的に作品の中に織り込まれており、より深い作品の読解が今後必要だろう。それについては稿を改めて論じてみたい。

今回着目した三つのテーマに加えて、木崎が書かなければいけないと感じていた問題は、もう一つあり、それは戦争という大きな主題であった。ここには当然ながら、彼女の満州での経験が反映されていよう。しかし、多くの作家がそうであるように、彼女もその体験を言葉で綴り、作品として昇華させるためには、相当の覚悟と時間が必要だったのではないだろうか。戦争については初期作品や短編小説でも言及されてはきたが、満州の記憶とともに本格的に長編として取り扱われるのは『蘇りの森』

(一九九九)においてである。富山、宗教、生命のテーマに加えて、戦争の問題をどのように作品に絡めて描き出していったのか、その深淵な作品世界を今後も探求していきたい。

注

- 一 小林成子「作家の責任について」木崎さと子とロレンスの場合」*Alfalfa* 一〇、一九八七年三月、一一九、江種満子「木崎さと子」論―「青桐」を中心に(女性作家の新流)―(現代の女性作家)」「国文学解釈と鑑賞」(別冊)、一九九一年五月、一四七―一五五、須波敏子「『青桐』論(特集 現代作家と宗教(キリスト教編))」(カトリック作家の世界)」「国文学 解釈と鑑賞」七四卷四号、二〇〇九年四月、一〇三―一〇八、谷川拓也「現代女性作家による富山文学の変遷」木崎さと子から山内マリコへ」『群峰』四号、二〇一八年三月、二七―三七、小林福美「木崎さと子『青桐』論―(他者)へと開かれた生命観」『日本文学誌要(村山龍先生追悼特別号)』一〇三号、二〇二二年三月、六八―八三。また太田久夫は一九八六年にそれまでの木崎の著述、参考文献目録を作成している。芥川賞受賞に至るまでの木崎の作家活動を知る上で非常に参考になる資料である。太田久夫「木崎さと子著述目録・参考文献目録」『富山県図書館研究集録』第一七号、富山県図書館協会、一九八六年三月。さらに『とやま文学』二三号でも「芥川賞作家・木崎さと子「空虚の時代に愛の本質を問う」と題して木崎の特集を組んでいる。『とやま文学』二三号、二〇〇五年三月。
- 二 木崎の経歴などに関しては、前掲の先行研究他、木崎さと子「自筆年譜」『とやま文学』二三号、一八〇―一八四、木崎さと子「死を凝視しつつ」『文學界』三九卷三号、一九八五年、三二―四三、「まつど文学散歩」⑩ 木崎さと子「青桐」『広報まつど』七二二号、一九九〇年一月二〇日、六、木崎さと子「夢の記憶―ある神父への手紙」(岩波書店、一九九七)を主に参照した。
- 三 須波、『青桐』論、一〇三。
- 四 同上。
- 五 木崎さと子「あとがき」『裸足』(文芸春秋、一九八二)、二五二。
- 六 同上。
- 七 木崎、「死を凝視しつつ」、三六―三八。
- 八 同上、三七―三九。
- 九 同上、三四。
- 一〇 同上、三三―三四。
- 一一 同上、四二。
- 一二 同上。
- 一三 木崎、『夢の記憶』、一〇。
- 一四 同上、九―一。

- 一五 木崎、「死を凝視しつつ」、三九―四〇。
- 一六 同上、四三。
- 一七 木崎さと子「裸足」『裸足』（文芸春秋、一九八二）、九七。
- 一八 江種、「木崎さと子論」、一五三。
- 一九 『ブリタニカ国際大百科事典』第二七卷（平凡社、一九八八）、一八七。
- 二〇 木崎、「死を凝視しつつ」、四〇。
- 二一 同上。
- 二二 ここでは木崎さと子「青桐」『青桐』（文芸春秋、一九八五）、五―一四―を参照した。テキストを引用する際には、本文中に頁数のみを記す。
- 二三 木崎、「死を凝視しつつ」、三六。
- 二四 同上、三六。
- 二五 高井有一、佐伯彰一「対談時評―木崎さと子「青桐」、桐山襲「風のクロニクル」」『文學界』三八卷一二号、一九八四年十二月、二〇八―二二三。
- 二六 木崎、「青桐」、一三、一四、二八。
- 二七 同上、一四。
- 二八 同上、五二。
- 二九 読売新聞医療情報部編著『完全図解 医療のしくみ』（講談社、二〇一一）、六六―六七。
- 三〇 木崎、「青桐」、八四―九八。
- 三一 同上、三〇。
- 三二 『日本大百科全書』一二卷（小学館、一九八六）、六六―六七、『日本大百科全書』二四卷（小学館、一九八八）二四卷、四四四。
- 三三 木崎、「死を凝視しつつ」、三四―三五。
- 三四 木崎、『夢の記憶』、一〇六―一一〇。

山内マリコ『あのこは貴族』における女同士のつながり

久保 陽子

はじめに

山内マリコ『あのこは貴族』は、『小説すばる』（二〇一五年一〇月号～二〇一六年七月号）に連載後、加筆・修正を行った上で、二〇一六年に単行本化された。二〇二一年には映画化もされている。境遇の異なる二人の女性登場人物が一人の男性をきっかけにつながり、互いに影響を受けながら、新しい人生を歩んでいく物語である。全四章で構成され、「第一章 東京」では東京出身で育ちの良い榛原華子の、「第二章 外部」では地方出身で大学入学のために上京し「苦労人」である時岡美紀の、それぞれの境遇と青木幸一郎との出会いが書かれる。「第三章 邂逅」で幸一郎の婚約者となった華子と恋人である美紀が出会い、「終章 一年後」では、幸一郎と離婚を決意した華子と、幸一郎との関係をきっぱりと断ち切った美紀が、それぞれに新しい人生を歩んでいることが示される。

二〇一六年六月に建替えに着手されたホテルオークラ東京が話題にのぼっていることから、物語の時間は作品発表当時とおおむね重なる。

山内マリコは、友情、恋愛、結婚、仕事といった日常的で身近なテーマを、主に女性同士の関係性において、とりわけ地方の閉塞感の中でその生きづらさを描いている。『あのこは貴族』でも同様のテーマを扱っているが、しかしながら、東京の特権階級でも、地方でも、狭く閉じられた人間関係における閉塞感と居心地のよさは「根本的には同じこと」とし、東京／地方という二項対立を相対化する。のみならず本作では、東京／地方、既婚／未婚、妻／愛人、結婚（家の内）／仕事（家の外）、依存／自立、裕福／貧乏といった二項対立の構図を持つものの、その対立や分断を乗り越えていくことが企図されている。

本作の先行論として、谷川拓矢は移動し続けることでもなく安住するでもなく、「部外者」性という距離を担保しつつ受け入れること」で「真に「自由」な生の可能性があることを提示した」一作品だとする。最終的に華子も美紀も東京／地方を行き来する姿が描かれるように、

移動は「自由」の獲得であり、此処から他所へという空間の移動は、地縁に根付く因習的で固定的な価値観をゆるやかにほぐしていく。さらに移動に伴う他者との出会いは、これもまた「普通」という認識にある自己を相対化する契機となりうる。土井孝義は自己の「潜在的な可能性」に気づかせてくれるのは、「意外な反応を返してくれる異質な他者」であり、「互いに「貴族」となりうる存在」だと述べる^二。

このように、移動と他者との出会いは、自己や自分が立脚する場所を相対化し、彼女たちの新たな生の獲得のための契機となる。それに加え本論で注目するのは、女同士のつながりである。彼女たちは互いの差異性を認めつつ、互いの人生に憧れながらも、自身を見つめなおし新たな充実した人生を歩んでいく。その際に「女同士を分断する価値観みたいなものが、あまりにも普通にまかり通って」いることに抗い、彼女たちがいかにしてその価値観を脱していくのかに着目したい。本論では、まず華子と美紀の対話を場所との関連の中で読み解き、次に、彼女たちが選んだ新しい人生のあり方をケアの視点を接続することで考察し、最後に幸一郎に視点を転じ、女同

士のつながりにおける男性の存在について考えてみたい。

一、華子と美紀の出会いーマンダリンオリエンタル東京

「第一章」では、二十七歳を目前にして、婚活に奮闘する華子の姿が描かれる^三。「辛かったり大変だったりしたけど、同時にはじめて自分の意志で生きてるって感じ」たとのちに振り返っているように、婚活は華子の成長の糧でもある。なぜなら他者との交渉の中で、自分の価値をはかられることで自分を知り、また自分の望む相手や条件を見極め選定していくことで自らの欲望を次第に明瞭にしていくからだ。このように、他者と出会うこと、それも互いに説明せずとも通じ合う特定の東京の内部から外部に出て、そこで自分と価値観を異にする他者と出会うことで、ようやく自分を知りえていく。美紀との出会いも同様の気づきをもたらす。華子と美紀が対話をする場面は二回ある。

一度目は、婚活を通じ華子の婚約者となった幸一郎が、とあるパーティで美紀と一緒にいるところを、華子の友人である相楽が不審に思い、二人を引き合わせた形だ。

この時に、華子と同じ世界に住む相楽が指定したのはマ
ンダリンオリエンタル東京のラウンジである。そこには
「多くは時間とお金に余裕のありそうな優雅なご婦人た
ち」が集うが、こうした高級ホテルのラウンジを日常的
に利用するのが彼女たちの文化である。

であるから、高級なこの場所は相楽と華子のテリトリ
ーのように思われるが、そこに美紀を交え、女同士が腹
を割って話しあう交流の場となっている。そこで、華子
と相楽の家の立派な雛壇の写真を見て美紀が驚き、クリ
スマスにミサに行ったことのない美紀に華子と相楽が驚
くように、自分たちの「普通」が「普通」ではないとい
う文化の違いを思い知る。自立心が強く気が合う相楽と
美紀に対し、依存的な華子は痛烈に批判もされる。また
幸一郎をめぐる華子と美紀が当事者であるのに対し、相
楽はあくまで第三者である。互いの話に「興奮気味に共
感」し「激しく同意」する一方で、「拒絶され傷ついた」
り、差別の笑いに「ピクリと反応」するように、共感と
反論とが混じり合う。そこでは必ずしも同質であること
の心地よさが歓迎されるわけではなく、意見や立場は違
ってもそれに驚き傷つきながらも、自分の価値観を他者

のそれと折衝していくことによって、自己を相対化し見
つめなおす機会となっている。

ところでマンダリンオリエンタルは、イギリス系の商
社が建てた香港に拠点に置く五つ星ホテルで、後にタイ
のホテルを買収し、世界一三カ国に展開するホテルグル
ープである。ホテルの給仕係の女性は「東洋のどこの国
の民族衣装ともつかない、不思議にエキゾチックな制服
を纏っていた」ように、それぞれの文化が他文化への憧
憬とともに織り合わされることで、明確な境界のない、
それゆえどこにもカテゴライズされることのない、文化
が行き交う磁場となっている。このグローバルな外資系
ホテルの窓からは「富士山らしきシルエット」が見えて
おり、「高級感溢れる内装」と一体となってコーディネート
トされている。日本の伝統・象徴としての富士山を望み
ながら、モダンに洗練された空間で語られるのは、近松
門左衛門『心中天網島』における「女同士の義理」とい
う古くも、また新しくもある物語である。

『心中天網島』では、治兵衛をめぐって、その妻おさ
んと遊女小春の攻防が書かれる。攻防といっても敵対す
るわけではなく、「女の相見互事」^{あひみがひこと}、つまり「弱い女どう

し互いに助けあうもの」^四とし、互いの心情を慮り、「女
 同士の義理」を立て、互いに身を引きあう。ドイツ留学
 中にこの話を知った相楽は、「日本スゴいじゃんって、本
 気で感動した」というように、グローバルな社会におい
 てローカルの再発見をする。日本の古典における心中は
 古い美学ではあるが、その中にある女同士のきめ細やか
 な心の交流と行動の潔さを、現代においても価値あるも
 のとして再認識している。このエピソードは自文化の再
 発見という文脈で語られるものの、同時に、本作が男性
 を中心に家の内と外、つまり正妻と愛人に分断される構
 図を持つ、極めて古い物語の型であることを知るに至る
 のである。しかしながら「普通なら憎み合って敵対関係
 になっても不思議ではないが、そうはならないのが、こ
 の映画（本作を原作とした映画を指す 注引用者）の面
 白いところ」^五というように、古い型を踏襲しながらも、
 心中では終わらない新しい女性たちの物語が創出されて
 いく。

「女同士の義理」を「かっこいい」として相楽の話に
 共感した美紀は、自らが身を引くだけでなく、対立する
 相手の心情へと想像力を傾けていくのである。美紀は華

子の質問に誠実に答えるだけでなく、「榛原さんは、幸一
 郎のどこがいちばん引つかかっているの？」と質問し、目
 の前の困っている相手の話に耳を傾け、力になるうとす
 る。また相楽も「友情の方にヒビが入る」ことを覚悟の
 上で、また結婚したら独身の自分とは疎遠になってしま
 うのならば「首突っ込めるうちに突っ込んでおいても、
 いい」とし、お節介を承知で華子のために尽力する。こ
 のように立場を越えて相手を思い合う気遣いは、華子を
 癒し、これにより華子が安心して自分を主張することを
 可能にする。そもそもコミュニケーションに関して、華
 子は悩みを誰にも相談できない性格であり、また家族の
 中でもほとんど口を開かず、幸一郎に対しても「主張ら
 しい主張をなにつしたことがない」。

そんな華子の悩みや、ストレスで親指の爪を噛む癖を
 「察してくれ、なおかつ言葉を選んで対応してくれ」る
 のがネイリストの西田燿子であるのは象徴的といえよう。
 燿子は技術的に爪をケアするだけでなく、「空気が読めて
 目端が利く」ように、相手の心情を思いやる能力に長け
 ている。相手への気遣いがある燿子が相手だからこそ、
 意見を言わない華子であっても、悩みを打ち明けられる

し、趣味に合わないネイルの色の提案を、遠慮がちではあるが断り、意見を主張することができたのだ。同様に華子は幸一郎との関係において「半年間隠してきた気持ち」を、美紀と相楽の前で「批判されるのを覚悟して、心の内を正直に語」りえている。気を許し近況や悩みを打ち明けることで華子の心は、ボロボロになった爪をケアされるように癒されていく。それだけでなく、最終章で華子は「ギャラ交渉」といったコミュニケーションをたぶんに駆使する仕事に就いているように、こうした思いやり溢れた女同士のつながりの中で、華子は少しずつ、自己主張する方法を学んでいくのである。

二、華子と美紀の出会い―「東京」

美紀との一度目の出会いを経て華子は、タイプの違う外側の世界に生きる美紀や相楽と比べて、「この狭い狭い世界で、うまくやっていくしかないのだ」と、その差異性を認め、自分の世界により強固にしがみつくことを決意している。狭い世界とは「結婚は誰もが当たり前のようになりつけるゴール」と思い込み、祖母や母の価値観

を当たり前のように踏襲した、幸一郎との結婚生活のことを意味する。しかし美紀との二度目の出会いで、華子は考えを変えている。後に幸一郎にその時のことを話し、「自分の力で生きてる」美紀を見て「ああいうふうになりたいなあって思うようになった」と述べている。「結婚にいつぱい期待していた」華子は、他方、いつともなく美紀のように自立的な生き方にも憧れていたことになる。その憧れの美紀の生き方を自らも実現しようとする決定打となったのは離婚であろうが、それだけではない。結婚生活の悩みを相談するために、この時、二人が会って話した場所は、美紀が指定した有楽町のイタリアンレストランである。そこは「みんな東京がアウェイだから、張り切っておしゃれし」、その人たちが作り出している「フェイク」の「東京」だという。そこには「独特の活気がある」というが、その「活気」の原動力は憧れ、もしくはコンプレックスであろう。店内に充満するバイタリティに圧倒」された華子は、自分の人生が「保守的で、退屈」と思い至るように、この場所も華子へ気づきをもたらしている。東京出身の華子が「東京」を発見するのは皮肉ではあるが、この「東京」は東京出身者では

なく、移動者たちの「強い独立心」に支えられている。

そして本作では移動はエンパワメントと結びついている。例えば相楽はドイツに音楽留学をし、経済的精神的に自立している。また華子の婚活相手の一人である商社勤務の亀井は、三年南アフリカに赴任し、日本に戻ってきて「軽く無双状態」の独身生活を謳歌している。ネイリストの燿子も、ハワイのネイルアカデミーに短期留学し、三〇歳を前に独立し自分の店を構えている。彼らはいずれも一度は「アウェイ」に身を置くことで、移動によって自己を相対化する視点を獲得する。そして一年後が描かれる終章において、華子と美紀も、移動しながら労働し、それぞれが風通しの良い中でのびのびと働く未来が示される。

三、ケアと労働をつなぐ

最終章で華子はヴァイオリニストである相楽のマナージャーとなり「いまの自分の方が好きだし、毎日が楽しい」と、充実した日々をおくっている。スケジュール管理、健康管理、運転手、雑用係、といった公私にわたる

広範な周辺の世話をするマナージャーの仕事は、家庭の内／外に簡単に線引きができない。そのことは芸能人のマナージャーを、配偶者や家族や友人などのいわゆる身内が務めている場合もあることからわかる。なぜなら、マナージャーの仕事は、単に仕事と呼ばれる業務だけでなく、配慮や気遣いといったケアの領域まで含める場合もあるからだろう。実際、華子は離婚したのち、相楽のマンションに住まわせてもらい「成り行きでマナージャーのような仕事を買って出ている」ように、友人との同居の延長上にその仕事はある。「ただで住まわせてもらうのも悪い」という理由で仕事を始めたわけだが、ここに公私を隔てないゆるやかな仕事のあり方がみられる。

私的領域の労働を家の外側へと広げていく仕事のあり方は、料理上手な華子の母・京子が、知り合いに請われて一時期ひらいていたという料理教室も同様である。帝国ホテルの正月料理を味わいながらその料理の味や作り方に関心を寄せる「研究熱心」な京子が作る料理と、それを学ぶ生徒はおのずとその層は限られてくるため、極めて内輪の知り合い同士が参加する教室であったらうことは想像がつく。もちろん相楽も普段は東京で、セレ

ブと括られるきらびやかな人が集まるパーティといった、限られたコミュニティでの演奏が主ではある。

しかし、それにとどまらず地方での演奏会にも赴き、その仕事は自分の世界の外側へと向けられている。二人がその人生の中で「必修の科目かなにかのように」享受してきた様々な文化・芸術は、東京やさらにその内側の狭い世界の特権的なものではないはずだ。「普段はクラシックに縁のない地元の人にも演奏家を歓迎してくれ、交流するのが楽しみの一つ」というように、クラシックに縁がないだけで、音楽を楽しみたい地元の人々の存在に彼女たちは目を向け、自らが移動し赴くことで彼らの文化的な欲求を満たしていくのである。それは「交流」であり決して一方的なものではなく、華子にとっても「新鮮」で「視野もぐっと広がった」経験ともなる。当たり前のようにタクシーを使い高級ホテルのラウンジで会っていた二人が、グーグルマップを見ながら自分の足で地方の美味しいカレーを求め姿には、自分の育った慣れ親しんだ「普通」の環境から、新しい世界へと移動したことが象徴的にあらわされている。

今でこそマネージャーとして相楽の体調を気遣う華子

だが、かつては幸一郎に「ケアしてくれな」いことを不安に思っていることを、美紀と相楽に話している。ケアについて山内は、エッセイ『皿洗いするの、どっち？目指せ、家庭内男女平等！』で「ケアとは、世話や配慮、気配り、手入れ等を指します」⁷と定義している。そこには世話や手入れという労働的な側面だけでなく、配慮や気配りという感情的な側面も含まれている。幸一郎は結婚後、仕事で忙しくし華子からの記念日の食事の提案を断り、ラインを既読スルーするなど、華子への気配りが行き届かなくなる。この二つの「事件」が華子を傷つけ離婚を決意する引き金となるが、華子は「大事に育てられたがゆえ、自分が大事にされないことに人一倍ダメージを食らってしまう」ように、ことさらケアされることを望んでいる。

ところでケアは自立しているようにみえる「富裕層こそが最も依存的であり、彼女たち・かれらは、数え切れないほどの個人的な仕方で、お金を支払う見返りにサーヴィスを提供してくれる人たちに依存している、という皮肉」⁸があるという。小説の冒頭で華子はタクシーで帝国ホテルに乗り付け、お節を作る代わりになじみの料

理屋で食事をし、そのまま帝国ホテルで年末と年始を過ごすように、榛原家の生活は有償のケア労働によって多くがまかなわれている。それと対比されるのが正月に実家に戻った美紀が、食卓に並んだ母の手料理を見て、これに加えてお節まで作っていたことに「その労働量を思っつてくらぐらした」場面である。時岡家は自分で車を運転するか、電車に乗って移動する。

このように華子の人生は、あらゆるケアによって成り立ち、それゆえ幸一郎にもそれを望み、また先述の美紀と相楽との対話の中でも、専らアドバイスをされる側であり、気配りは一方的に華子に向かっている。しかし、ケアされる側にいた華子が「誰かの世話をし、支え、尽くすことでその人が輝くと、得も言われぬ喜びを感じる性分」であると、自分を再認識することに至る。華子が同じ場所に居続け、夫に「寄生」する専業主婦の役割に縛られ続けていたら、専らケアされることに捉われ続けるため、得られなかった視点であろう。

一方、美紀は最終章で同郷の友人でかつて共に慶応義塾大学に進学した平田佳代とともに、地元で観光客を誘致するための企画や制作をする会社を始めている。東京

と地方を行き来する姿は先の華子たちの移動と重なる。また美紀と平田の姿は、地方の町おこしをテーマにした次の小説『メガネと放蕩娘』（文藝春秋、二〇一七年）へと繋がるものである。平田がいう「東京目線で地元のいとこを見つけ」という外部の視点の導入の重要性は、引き続き描かれることになる^九。

ところで美紀が地元へと目を向けたのは、華子と出会うことで、生まれながらにして分厚い壁があることを改めて思い知らされたことが一つにはある。加えて、かつての憧れの内部生（大学以前から慶応に通う慶應大生注引用者）と第一印象こそ「寸分違わぬ」華子と実際に言葉を交わしてみると、幸一郎との関係で悩み、痛々しいほどに無垢な存在であることを知り、憧れの空虚^{一〇}「まぼろしの東京」に気づき、その執着を失ったからであろう。それに加え、東京から地元へ、そして地元から東京への移動は、心をかき乱すほどの大きな感情のうねりとなっている。ゴーストタウンのように寂れた町の風景を見て、「厄介な郷土愛に心の中がぐちゃぐちゃになった」^{一一}り、東京にいながらも「ついさっきまで見ていた景色が脳裏にフラッシュバックして、美紀を大いに混乱させた」

のは、美紀が二つの場所に立脚し、その比較の中で相互的で客観的な視野を持ち得たからだ。そうした複雑な郷土愛を仕事へと具現化するには平田の存在が必要だったが、上京前の高校生の「家と学校の往復で参考書ばかり目を落としている美紀には、なにも見えていなかった」ように、移動によって美紀は関心を地元へと向かわせることになる。そしてケアを段階的に四つの局面で示したジョアン・C・トロントは、「第一に、ケアには、関心を向けることが必要」であると述べている¹⁰。であるから無関心あるいは無知は、ケアの対極にある言葉であろう。いかなるケアをするにせよ、まずそこに関心を払い、可視化することが大前提となる。

こうした地元や他所への無関心はテキストの別の箇所にもあらわれている。物語の冒頭、榛原家の正月の食事の場面には香箱蟹が登場する。香箱蟹とはズワイガニの雌のことで、北陸地方でこの名で呼ばれる。作者の出身である富山を想起させ、また代々漁業に携わっていた美紀の実家や地元を連想させるものの、美紀の地元がどこであるかはテキストには明示されない¹¹。とはいえ、「魚が減って、漁師も減った海」がある地方の美紀の実家は、

漁獲量がめつきり減り、家業の漁業を辞めている。かつての生活の糧としての資源が失われ、人が減り、不穏な気配が立ち込め、サラリーマンへと鞍替えした父が勤めていた工場も閉鎖され、それにより美紀は実家からの仕送りを打ち切られ、大学を中退し水商売で働くことを余儀なくされる。その一方で榛原家では漁期が短く希少な食材である香箱蟹を堪能している。希少で美味であるがゆえに有り難がつて食べているものの、香箱蟹がどこでどのように獲れているのか、それを獲る漁師の生活にまではもちろん関心はいかない。

また冒頭で華子が、そして結末で美紀が乗るタクシーの運転手は酷く雪が降る地方出身だという。この運転手がなぜ東京に働きに出ているのかは説明されないが、東京の生活は地方の資源や出身者によって支えられていることが示される。しかしそれを享受する東京出身者が、そこに関心を払うことはない。タクシー運転手の田舎の話聞いた華子が「東京以外の地理なんてさっぱりわからないし、とくに興味もなかった」ように、狭い世界にいる華子にとってそこに関心が向けられることはない。しかし最終的に華子や美紀は、狭い限られた世界から視

野を拡げること、初めて此処と其処の差異性に気づき、そこに足りないものや必要とされるものに関心を向けることができるようになる。彼女たちの労働は文化や資本の中心化を是正し、多元的な社会のあり方を模索する。それを彼女たちは友人同士というプライベートな女同士の関係性の中で、気配りや関心を向けること、つまりケアの方法を内側から外側の領域へと拡げていくことである。

四、青木幸一郎と「対等」になること

華子と美紀が新たに人生を踏み出した一方、狭いコミュニティに留まり続けるのが幸一郎である。終章で幸一郎は政治家になるべく地方と東京を行き来するものの、その土地は選挙区でありあくまで人脈作りのための会合に顔を出している。政治家を輩出してきた青木家の長男という宿命から「逃げられない」ように、自分の意志で人生を決めることができないところに同情をみることもできるかもしれない。しかしながら「日本を動かした人物の子孫は、いまも同じ場所に集積して、そこを我が物

顔で牛耳っている」というように、幸一郎はその出自ゆえに特権性が与えられている。慶応の内部生で、東大の大学院を出て弁護士そして政治家となるように、華々しい経歴の持ち主である。だからこそ華子も美紀も惹かれた一方で、「対等」な関係が築けなかった。幸一郎について、美紀が「本質的には……すごく情の薄い、ちよっと冷たい人」とし、華子が「……心が……あんまり感じられない」と語るように、親しい間柄であるはずの二人との心的距離は縮まらない。それは予め決まった人生に向かい、努力を惜しまず邁進しようとする彼の真面目さや実直さも一因となっている。

幸一郎の美紀との関係をみると、親の離職によって水商売で働き、自力で生きてきた寄る辺のない美紀にとつては、幸一郎は「保険」である。また大学時代の憧れの王子様であり、後にホステスと客として再会し親密な間柄になってからは、「その王子様と対等に遊べる関係を手放したいだなんて、思うわけがなかった」。ここで「対等」という言葉が使われるが、それは後に「間違はなく美紀を搾取し、損なっていく」関係であったと認識しなおされるように、決して「対等」ではない。美紀は華子と違

い結婚を第一に考えているわけではないが、とはいえ、報われない思いを抱き続けることは疲弊する。のみならず水商売で培った「見栄えもして座持ちもうまい」美紀の能力は、その後にはIT企業に転職してからも、幸一郎に利用され続ける。パーティに呼び出され同伴させられる美紀は、恋人あるいはもつと曖昧な関係のもとで、賃金が発生しない労働へと駆り立てられている。そして幸一郎の余念ない人脈作りのために搾取されていく。それは幸一郎が政治家になるために、華子はその申し分のない妻として選ばれたのと同様である。

一方、幸一郎と華子との関係をみてみると、美紀や相楽のアドバイスの甲斐もなく、本音で話し合う機会を逃したまま、二人は離婚する。幸一郎は仕事で家にいることが少なく、また喧嘩して華子が出ても、幸一郎の帰宅前に戻ってくるため「ひとり相撲」であったため、華子の怒りや悲しみの感情は気づかれることがなかった。とはいえ、一週間に一度の割合で大きな諍いが起きたというのに、離婚を突き付けたときに「え、意味がわからないんだけど」と言い放つ幸一郎は、自分の特権性ゆえに離婚されることはないとあぐらをかく傲岸さと、家庭

や妻への無関心がある。それは無理やりにも話し合いの場を持たなかった華子にも非があるのかもしれない。しかし他者への無関心や無配慮に起因する幸一郎の冷たさは、政治の問題でもあるのだ。美紀が地位も名誉も金もある中年男性を「自分と自分の周りのお友達だけが世界の中心で、それ以外の人のことなんて本気で視界にも入ってない」と辛辣に批評し、また華子が特権階級の狭い世界に生きる幸一郎が政治家になることに対して、直感的に「空恐ろしい気持ちに駆られた」ように、幸一郎の問題は家の外の問題でもある。それは華子が親密なつながりにおけるケアを、外側の仕事へとひらいていったことと好対照をなすものでもある。

ところで、幸一郎が政治家になることを妻である華子に相談しなかったのはなぜだろうか。あらかじめ決められた運命として相談する余地すらなかったからだろうか。華子は妻である自分に相談がなかったことに傷ついていくが、幸一郎はそれを言うことができなかったのではない。幸一郎は「逃げられない」という幸一郎の言葉を受け、華子はその「諦観」と同時に、「このときはじめて、幸一郎が本音で話していると思った」ように、決められたレール

ルに乗る生き方は幸一郎にとって不本意だったともいえる。そして、そこから降りられない自分の弱さを見せることができなかつたともいえる。ここに幸一郎の本心があるとしたら、そしてそれをようやく華子に話すことができたのなら、そこに可能性をみたい。

華子や相楽が幸一郎と同じ狭い世界から外へ飛び出し、また幸一郎の姉が海外在住であるように、同じ青木家に生まれていても、女か男かの別により、人生は大きくかわる。男であることが幸一郎を狭い場所に縛り続けているとしたら、まずその「男らしさ」^{二三}から降りることが必要だろう。杉田俊介はマジョリティである男性が「他者の前に自分を無知で無力なものとして差し出す、他者の前に無防備で脆弱な自分（たち）をさらけ出す」^{二四}とで自己変革をみるように、元妻の華子に本音を話すことはその一歩であろう。他方、華子もやはり当時は幸一郎のそうした悩みに配慮することができていなかった。しかし他者と交流し視野を広げ幸一郎がいうところの「しつかり者」の現在の華子であるならば、かつては一方的に望んでいたケアされることを、相楽にしているように今度は幸一郎へと向けることができるかもしれない。

華子は「わたしいま、やっと幸一郎さんに、自分を出せる気がする。対等に話せてるって感じ」と自らの感情を吐露する。これは裏返して言えば、それ以前の二人の関係性では、つまり恋人や夫婦としては「対等」ではなかつたということである。敬語を使いながら話す華子と、たとえ年上であつても軽口を叩きながらフランクに話す幸一郎が、「対等に話せている」かどうかは疑問が残るところではあるが、少なくとも、華子がこの時点で「対等」と思っていることは確かである。それは華子が幸一郎が初めて「本音で話している」と感じ、また「声を上げて笑うことはほとんどない幸一郎が、この時に「大笑い」しているところからも、幸一郎が華子を信頼し腹を割って話していることがうかがえるからである。こうしてケアされる側からケアする側へ、そしてケアを受け入れる弱さを認めることの先に相互的なケア、つまり「対等」な関係がみえてくるのではなからうか^{二四}。

おわりに

今まで、華子と美紀を中心に、二人の対話のあり方や、

新しい人生における仕事のあり方を、気遣いや関心を寄せるケアと接続させ、そこに女同士のつながりをみてきた。加えて幸一郎について、弱さを見せることのできない男性の生の困難も描出されていたことを指摘した。華子は友人との私的領域で生じるケアを公的領域である仕事へと拡張し、美紀は無関心であった地元へと関心を寄せることでそこに新たな仕事を見出した。その際に、移動することが自己を相対化する視点の獲得となり、ひいては無関心から関心へ向かう契機となっていた。そこでは中心化する社会のあり方を是正する多元的な価値観が描出されてもいる。

こうして、華子も美紀も、相楽と平田との友情の中で、生を充実させるが、はたして女の分断は乗り越えられたといえるのだろうか。「自分たちの友情が、女だけの世界で平和に調和していたころを思い、華子はかすかに胸を痛める」のは、男性の介入によって既婚／未婚とに分けられた際の華子の心境である。華子と美紀は対立こそしなかったものの、二人とも幸一郎から離れ、かつての友情へと回帰していった。独身の友人同士で仕事をするとは、そして男性をいったん人生から締め出すことは、

「マンズ・マンズ・ワールド」を脱したようであり、それは美紀がいうところの「それってすごく、ファンタジーな気がする」世界ともいえなくもない。

これより前に書かれた短編「お嬢さんたち気をつけて」『かわいい結婚』（講談社、二〇一五年）では、一人の男性をめぐる女性と友人同士が分断を乗り越え、人生において共闘していく様子が描かれている。結末は、二人が別々の方向を向きながらそれぞれに自分の未来を思い、溜息をつくところで終わる。仕事と結婚のどちらを選んでも困難が待ち受けていることが暗示される結末には、わかりあえないかもしれないが、一緒に過ごしてくれる友人がいるという唯一の救いもある。

しかしながら、彼女たちがこれからどう生きるのか、女性同士のみならず、対男性との関係のなかで、いかに「対等」に生きるのかは、今後の作品を待たねばならないだろう。山内作品は「少しずつ弁証法的に発展していく」^{二五}ように、また作家のライフステージとも重なるようにテーマも少しずつ変容しているが、男性のいる世界での男女の「対等」のあり方については、次のエッセイ『皿洗いするの、どっち？目指せ、家庭内男女平等！』

でより追求されることになる。

付記

- ・テクストの引用は山内マリコ『あのこは貴族』（集英社、二〇一六年）に拠った。
- ・本稿は令和三年度高志プロジェクト「〈女性〉と〈労働〉からみた富山女性とその文化的背景―『大コメ騒動』、そして『あのこは貴族』へ―」による成果の一部である。

注

- 一 谷川拓矢「現代女性作家による富山文学の変遷―木崎さと子から山内マリコへ―」『群峰』（二〇一八年三月）
- 二 土井隆義「意図せざる出会いの豊かさ―映画『あのこは貴族』の女性たちをめぐる―」『図書』（二〇二一年一月）
- 三 なお結婚における二十七歳という年齢について、作田佳菜「山内マリコ」やがて哀しき女の子」にみる地方都市の女性像」『富大比較文学・第二期』（二〇一九年二月）に地方都市の結婚観についての分析がある。
- 四 近松門左衛門 諏訪春雄訳注『曾根崎心中 冥途の飛脚 心中天の網島』（角川文庫、二〇〇七年） p 259 脚注。

- 五 野島孝一「アートな時間 映画あのこは貴族 境遇の異なる2人が出会う女性による女性のための作品」『エコノミスト』（二〇二一年二月）
- 六 谷川は「憧れとコンプレックスは表裏一体」と述べている。注1に同じ。
- 七 山内マリコ『皿洗いの、どっち？目指せ、家庭内男女平等！』（マガジンハウス、二〇一七年）
- 八 ケア・コレクティブ 岡野八代・富岡薫・武田宏子訳『ケア宣言』（大月書店、二〇二一年） p 39・40
- 九 村上瑞季「山内マリコ『メガネと放蕩娘』における富山と学生によるまちづくり」『富大比較文学・第二期』（二〇一九年二月）では、地方都市の商店街の活性化に際して、他の地方都市からやってきた人物が「客観的」に「問題意識」を持ち「商店街の外で暮らしたことがある人物が積極的に行動をしている」という。
- 一〇 ジョアン・C・トロント 岡野八代訳・著『ケアするのは誰か？―新しい民主主義のかたちへ』（白澤社、二〇二〇年）では、ケアの局面を「1、関心を向けること Caring about」「2 配慮すること Caring for」「3 ケアを提供する（よ） Care-giving」「4 ケアを受け取る（よ） Care-receiving」とする。
- 一一 地方都市がどこか明示されない点について、谷川は「地方都市（だ）けにとどまらない問題」をめぐるより普遍的な物語への企図が窺われる」と述べている。注1に同じ。ちなみに映画『あのこは貴

- 族』では美紀の地元の場面は富山で撮影され、富山弁も使用されている。DVD『あのこは貴族』（東京テアトル制作、バンダイナムコアーツ発売、二〇二一年）
- 一二 西田谷洋「らしさを生きる／らしさに抗う―山内マリコ『選んだ孤独はよい孤独』と『あたしたちよくやってる』』『芸術至上主義文芸』（二〇一九年一〇月）では、「自分らしさ」について論じる中で、「日本の男性優位社会において、向いていない中で自分を保ち続けることで出世してしまう／いかざるをえない男のあり方も示している」と指摘する。
- 一三 杉田俊介『マジョリテイ男性にとってまっとうさとは何か』#Me too に加われない男たち』（集英社新書、二〇二一年） p.47
- 一四 映画『あのこは貴族』の監督・脚本である岨手由貴子は幸一郎と華子は「定義できない関係性を築いた」とし、「ハッピーエンドなんだと思っていた」と述べている。「映画『あのこは貴族』公開記念インタビュー 監督・岨手由貴子 シスターフッドからフレンドシップへ」『小説すばる』（二〇二二年三月）
- 一五 小谷英輔「〈子どもたちの時間〉の現代―山内マリコ論序説」『群峰』（二〇一七年三月）

群峰 第6号

発行日：2021年4月1日

◇特集 翁久允

逸見 久美

わが想い出に生きる父翁久允

須田 満

翁久允「安孫子久太郎翁と私」―自筆原稿の翻刻と解説

水野 真理子

翁久允と富山―『高志人』で目指した郷土研究

近藤 周吾

新民謡の流行―『民謡詩人』を中心に

◇研究論文

谷川 拓矢

共振する性欲―田中兆子「べしみ」論、あるいは性欲文

学史序説

◇資料・報告

高熊 哲也

「黒百合」私注

金山 克哉

滑川文学散歩 記録

高熊 哲也

文学散歩報告 いたち川沿いを歩く

◇2019・2020年度 活動報告

富山文学の会 2021年度 活動報告

第79回	5/8(土)～ 5/9(日)	室生犀星学会2021年度大会 協賛 (富山県民会館) 「室生犀星「紙幣」と亀屋原徳の脚色による戯曲」 外村彰氏 「室生犀星の影響圏——北陸、特に富山を中心に」 近藤周吾 文学散歩 高熊哲也 13名
第80回	6/30(水)	研究会 (富商會館) 国語教育者としての宮崎健三 金山克哉 5名
第81回	12/10(金)	研究会 (富山高専本郷・リモート) 「翁久允と富山—『高志人』で探求した日本の思想・文化」 水野真理子 5名
第82回	3/26(土)	研究大会 (富山高専本郷・リモート) 第11回大会 講演 作家と作品モデルの確執～「天の夕顔」を中心として～ 立野幸雄氏 最終講義 「日本の近代化と富山を舞台とした作品群」 高熊哲也 研究発表 『『青鞥』の鉄道小説——尾島菊子「夜汽車」における〈視差〉』 近藤周吾 「富本一枝 著作調査」 黒崎真美

群峰 第5号 富山文学の会10周年記念号

発行日…2019年4月20日

◇特集 富山文学の会10周年

高志の国文学館

お祝いのことば

富山高専専門学校

祝辞

金子 幸代

「群峰」記念号に寄せて

富山文学の会

富山文学の会 十年の軌跡——二〇〇九年から二〇一

八年まで——

黒崎 真美

富山文学の会発足あれこれ

高熊 哲也

富山文学の会との出会い

今村 郁夫

金子幸代氏の講義と富山関係の業績

綿引 香織

高志の国文学館と富山の文学

近藤 周吾

富山高専と富山文学の会

西田谷 洋

尾島菊子『教育勅語御伽噺 少女の一念』のこと

金山 克哉

さまざまな〈富山〉

◇研究論文

水野 真理子

小寺菊子の死生観——「逝く者」より

金山 克哉

高島高詩集『山脈地帯』における「戦争の詩」

丸山 瑠一

堀田善衛の天皇小説「曇り日」をめぐって

中山 悦子

佐多稲子「水」における敗北と春の陽——感情表現をふ

まえて——

高熊 哲也

黒部ダムをめぐる作品群——吉村昭「水の葬列」と「高熱

隧道」、そして木本正次「黒部の太陽」

谷川 拓矢

断絶と和解の円環——山川健一『人生の約束』論

関戸 菜々子、姫野 諒太郎、早瀬 裕也、小谷 瑛輔

ナツツタの樹液による芋粥再現実験

◇2018年度 活動報告

編集後記

▼昨年（二〇二一年）の五月十三日に富山文学の会の創設者である金子幸代先生がご逝去されました。富山文学の研究発展のため、当会を設立し、設立後も私たちを導いてくださったことには感謝しかありません。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。富山文学の研究を深め続けることが先生のご遺志を継ぐことだと、当会一同決意を新たにしています。

▼今号では、先生への追悼五編、意欲あふれる研究論文四編が集まりました。かつて先生の教えを受けた方々のご寄稿を読むと、先生の笑顔が目に浮かび、声がじかに聞こえてくるようでした。先生はとても学生思いで、学生に今必要なことはもちろん、将来のことも考えて指導してくださっていたのだと、改めて感じました。研究論文も富山の作家や女性作家を対象としたものが多く、先生も天国でうんうんとうなずきながら読んでくださっているのではないかと思っています。

▼新型コロナウイルス感染症の収束は見えつつある

ように感じる一方、国際情勢は不安定な状況になっていきます。文学部・人文学部とは人間を研究する学部だという趣旨のことを学生時代に聞いたことがあります。他の学問と違い、成果が見えにくい文学研究ですが、人間を研究する学問として、なくてはならないものだと考えています。先生の言葉を借りるなら、本物を見る目、そして批判精神を養って未来を切り拓くためにも、まずは身近な富山文学の研究を深めていきたいと思います。

今村記

群峰 第7号

二〇二二年四月一日 発行

編集・発行 富山文学の会

連絡先 富山県射水市海老江練合1番2

富山高等専門学校（射水キャンパス）

近藤教員室

